

令和6年度 研究紀要

# しらかみ

第 31 号

児童生徒の学びが「見える」授業づくり

～指導と評価の一体化による確かな成長を目指して～

(2年次／2か年計画)

秋 田 県 立 能 代 支 援 学 校

## 発刊に当たって

周知のとおり、現行学習指導要領の改訂により、知・徳・体にわたる「生きる力」を一層具体化するため、全ての教科等の目標及び内容が、三つの資質・能力として再整理されました。その実施に当たって重要なことは「学びの連続性」を保障すること、すなわち、児童生徒が確実に資質・能力を身に付け、その学びを積み重ねられるようにすることです。そのため、学習指導要領に定める目標に基づいて学習状況を評価できるよう、「観点別学習状況の評価」の実施が求められています。

これらを踏まえて、本校では、研究主題を『児童生徒の学びが「見える」授業づくり～指導と評価の一体化による確かな成長を目指して』とし、2か年にわたる研究に取り組んでまいりました。本研究は、「各教科等を合わせた指導」においても、目標とする各教科の資質・能力を確実に育むための要点を明らかにするものです。これまで、本校で作成した「観点別学習評価表（学びの履歴シート）」を核にして、個別の指導計画や年間指導計画、学習指導案の関連性を深めた新様式に改め、実践研究を積み重ねてまいりました。

なお、本研究において、一貫して留意したことがあります。それは「普段使いできる平易さ」です。私たちは、本研究の「ゴール」として、研究で得た知見や技術、構築したシステムなどを、「普段使いできる仕組み」としてまとめ、日々の実践の中で、無理なく、当たり前前に活用していくことを目指してきました。

令和6年12月12日に開催した公開研究会には、来校者とオンデマンドでの視聴者を合わせ、県内外から約140名に御参加いただきました。多くの皆様と本研究に係る協議を深め、貴重な示唆を得られましたことに、改めて感謝申し上げます。本研究会で明らかになった課題を整理し、その解決に向けて新たな作業部会を立ち上げ、今なお研究を進めています。

本紀要に2年間にわたる研究実践を集約しました。全国の先進校による優れた取組には遠く及びませんが、本校の身の丈に合った実践の一端を記したものです。拙い実践ではありますが、御一読の上、皆様からの御指導や御助言を賜りますようお願いいたします。

結びになりますが、本研究に対し、丁寧な御指導をいただきました文部科学省初等中等教育局特別支援教育課 特別支援教育調査官 加藤 宏昭 氏、国立特別支援教育総合研究所 総括研究員 武富 博文 氏に心より感謝申し上げます。

校 長 佐 藤 圭 吾

# 目次

発刊に当たって	1
目次	2
全校研究	3
・ 研究のまとめ	11
学部研究	14
・ 小学部	15
・ 中学部	19
・ 高等部	23
寄宿舎研究	27
各資料	34
・ 資料1 観点別学習評価表（学びの履歴シート）（様式）	
・ 資料2 個別の指導計画（様式例）	
・ 資料3 年間指導計画（様式）	
・ 資料4 学習指導案（様式）	
・ 資料5 秋田県立能代支援学校「能代スタンダード」	
・ 資料6 標準年間指導計画（試案）	
公開研究会〈記録〉	44
各学部 学習指導案・年間指導計画	53
あとがき	72
研究同人	73

# 全校研究

---





研究主題 児童生徒の学びが「見える」授業づくり  
～指導と評価の一体化による確かな成長を目指して～ (2年次/2か年計画)

## I 研究主題設定の理由

### 1 特別支援教育の動向

学習指導要領の改訂により「生きる力」を育成することの重要性が示され、全ての教科等の目標及び内容が三つの柱で再整理された。知的障害特別支援学校の各教科等においても各教科の内容や構成の充実が図られ、育成を目指す資質・能力を明確にして計画的な指導を行うことが示された。特別支援学校学習指導要領解説（各教科等編）では、各教科等を合わせて指導を行う場合も各教科等の目標を達成していくことや、各教科の目標に準拠した評価の観点による学習評価を行うことの必要性が明示された。学習評価については、特別支援学校小学部・中学部学習評価参考資料（文部科学省 2020）において、各学校にて「観点別学習状況の評価」を行うに当たっては観点ごとに評価規準を定める必要があることや、学習指導要領改訂の趣旨を実現するためには指導と評価の一体化の実現がますます求められていることが示されている。

### 2 知的障害特別支援教育における現状

知的障害特別支援教育においては、学習指導要領の趣旨に基づき、各教科等を合わせた指導の実践に関する各教科等の取扱いや学習評価等の在り方が再考されている。

丹野（2022）は、各教科等を合わせた指導の意義と課題を述べる中で、学習活動を通して何を学んだのか、特に、各教科等の目標から何を学び得たのか明確でないという指摘もあることを示唆し、学習内容をどのような学習活動を通して学び、育成を目指す資質・能力を目指しているのか明確にしておく必要があるとしている。

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所による「知的障害教育における授業づくりと学習評価に関する研究」成果報告書（2024）では、知的障害教育における学習評価について、どの指導形態においても学習集団に属する児童生徒の実態を把握し、指導目標や指導内容を考えた上で学習評価をする必要があるとしている。その際は、児童生徒の各教科の学習内容の習得状況等を確認した上で、その児童生徒に個別に付けたい力を想定した上で学習内容を設定することと、その学習内容が各教科の目標・内容を反映させていることを十分説明できるような仕組みを考えることが重要であると述べている。

### 3 学校の現状から（令和5年度～令和9年度秋田県立能代支援学校教育プランより）

本校には発達障害や肢体不自由のある児童生徒も在籍しており、一人一人の実態に応じた指導と指導方法の共有が必須である。児童生徒の学習履歴を踏まえ、入学から卒業まで一貫した指導を行えるよう、教育計画や体制の整備を現在進めている。

上記1から3の内容を踏まえ、学習指導要領に示された各教科等の目標・内容を計画的に指導し資質・能力を確実に育むためには、児童生徒の学びを可視化しながら、指導と評価の一体化を図るための体制づくりが重要であると考え、本主題を設定した。

## II 研究の目的

一人一人の学習状況を評価規準に基づいて的確に捉え、資質・能力を育むための授業づくりの在り方や効果的な指導方法を見いだす。

## III 研究内容・方法

### 1 研究対象

研究対象は各教科等を合わせた指導とする。指導の形態は各学部で選択する（小学部及び中学部は生活単元学習、高等部は作業学習を選択）。

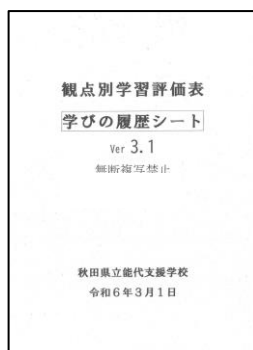
### 2 研究内容・方法

#### (1) 研究の概要

「観点別学習評価表（学びの履歴シート）」（※1）を踏まえて教育計画の内容を見直し、授業実践に活用することで、育てたい資質・能力の可視化を図り、指導と評価の一体化を目指す。

1年次は、一人一人の育てたい資質・能力の確認や単元で扱う指導内容の選定の仕方等、各教科等を合わせた指導の単元及び授業のつくり方について検討した。2年次は、指導と評価の一体化を図るために、学習履歴を踏まえた年間指導計画の作成等、各教科等を合わせた指導において各教科等の目標を達成していくための授業づくりの仕組みを検討する。併せて、授業においては、資質・能力を確実に育むための、児童生徒の「参加」と「学び」を促す指導方法を検討し、それらを「能代スタンダード」として集約する。

各年次の研究内容は、授業研究会や研究協議会を通して実践検証する。



（冊子版）

#### ※1 観点別学習評価表（学びの履歴シート）について

- ・本校では、特別支援学校小学部・中学部学習評価参考資料（文部科学省令和2年4月）に基づき、各教科における内容のまとめりごとの評価規準として、観点別学習評価表を作成した。
- ・観点別学習評価表に示した評価規準は、児童生徒が学校在籍期間で身に付ける資質・能力そのものであり、当該年度で育成する資質・能力を選定、集約したものは、「個別の指導計画」の一部として扱っている。なお、観点別学習評価表は入学から卒業までの学習の足跡を記す「学びの履歴シート」を兼ねている。
- ・冊子版は各教師に配付。学びの履歴シート等の運用はExcelデータを使用。

#### (2) 1年次の研究

1年次の研究内容及び成果と課題は以下のとおりであった（詳細は、令和5年度研究紀要「しらかみ」第30号を参照）。

##### < 1年次の研究内容 >

- ・観点別学習評価表（学びの履歴シート）に基づき改訂した個別の指導計画による、当該年度で育てたい資質・能力の確認と評価
- ・単元で扱う各教科等の指導内容の選定と学習活動の配列に関する検討を通じた単元づくり
- ・児童生徒の「参加」と「学び」を促すための指導方法の検討と共有

### < 1年次の成果と課題 >

成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・観点別学習評価表（学びの履歴シート）の活用による指導目標及び指導内容の明確化</li> <li>・活動中心の単元目標の設定から、育てたい資質・能力に準拠した単元目標の設定への転換</li> <li>・児童生徒の「参加」を促すための指導方法の検討と共有</li> </ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一人一人の学習履歴を明確にし、計画的に指導を行うための、年間の指導内容の可視化</li> <li>・育てたい資質・能力に準拠した単元目標に応じた単元構成</li> <li>・児童生徒の「学び」を促すために各教科等の見方・考え方を働かせる等の授業の工夫</li> </ul>

### (3) 2年次の研究

2年次は、1年次の成果と課題を踏まえ、指導と評価の一体化を図るための「授業づくりの仕組み」を考案し（※2）、授業実践に取り組んだ。研究内容と研究計画を以下に示す。

#### ①研究内容

- ・一人一人の学習履歴を踏まえ、指導内容を計画的に選定するための、改訂した年間指導計画の作成と活用
- ・資質・能力を確実に育む授業づくりの仕組みを生かした単元計画・実践・評価と要点整理
- ・児童生徒の「学び」を促すための、各教科等の見方・考え方を働かせた授業展開や手立ての工夫

#### ※2 授業づくりの仕組みについて

指導と評価の一体化を図るために、授業実践において扱う各教育計画等を、観点別学習評価表と関連付けて作成・改訂した。それらをツールとしたPDCAサイクルによる授業実践の一連を、本研究では「授業づくりの仕組み」と位置付けた。この仕組みは、指導と評価の一体化を図り、資質・能力を確実に育むことと併せて、日常的に活用しやすい平易な仕組みとしての運用も目指す。

##### ツール①「観点別学習評価表」自校作成 [資料1]

- ・学習指導要領に基づいた各教科の内容のまとまりごとの評価規準であり、在学中に育成する資質・能力を網羅したもの。個別の指導計画に記す、各教科等で育む資質・能力の選定元である。併せて「学びの履歴シート」として学習の履歴と評価を蓄積することで学習指導要領に示す各教科の内容の確実な実施と、一人一人の「学びの連続性」を確保する。

##### ツール②「個別の指導計画」自校作成 [資料2]

- ・「自立活動に係る指導計画」と「各教科等に係る指導計画」で構成。
- ・「各教科等に係る指導計画」については、観点別学習評価表に記す内容から当該年度で育成する資質・能力の選定と評価を行う。

##### ツール③「年間指導計画」令和6年度改訂 [資料3]

- ・学習集団として。どの時期に何を学ぶかが分かるよう、各教科等を合わせた指導の単元で扱う各教科等の内容のまとまりを簡潔に記す。

##### ツール④「学習指導案」令和6年度改訂 [資料4]

- ・各教科等を合わせた指導の年間指導計画に基づき、当該単元で扱う各教科等の内容のまとまりを、単元及び各授業の指導計画として具体化する。単元目標については、学習活動の目標を廃し、「当該単元において育成する資質・能力」を目標とする。

## ②年間計画

以下の研究年間計画により研究を進める（表1）。研究全体会は年5回、学部研究会は月に1回を基本とし、学部や全校で内容を共有しながら実践を進める。年次研修に係る授業研究会は、授業力向上に向けた研修機会と捉え、学部を中心に参観し、各自の実践に生かす。

表1 令和6年度 研究年間計画

月	全校研究	学部研究	授業研究会 (全校授業研会・年次研修)
4	18日 研究全体会① ・研究内容確認		
5		20日 学部研究会①	
6		12日 学部研究会② (小学部・高等部) 17日 学部研究会② (中学部)	18日 8年目研修 研究授業 (日常生活の指導 小1・2)
7	16日 指導主事計画訪問 ・研究説明 ・授業提示 25日 研究全体会② ・研究経過共有	25日 学部研究会③	1日 初任者研修 研究授業 (日常生活の指導 小1・2) 2日 初任者研修 研究授業 (日常生活の指導 小3) 22日 中堅研修 研究授業① (生活単元学習 小5)
8	2日 研究全体会③ ・能代スタンダード研修会	21日 学部研究会④	
9		9日 学部研究会⑤	5日 初任者研修 研究授業(算数科 小3) 11日 中堅研修 研究授業② (日常生活の指導 小5) 17日 初任者研修 研究授業(国語科 小2) 25日 5年目研修 研究授業 (生活単元学習 中1) 25日 全校授業研究会 兼 公開研究会事前授業 中学部(生活単元学習 中2) 26日 学部内授業研究会 高等部 (作業学習 総合サービス班)
10		7日 学部研究会⑥	7日 公開研究会事前授業 小学部 (生活単元学習 小1・2) 8日 授業づくりプロジェクト 研究授業 (国語科 小6) 15日 公開研究会事前授業 高等部 (作業学習 縫製班)
11		7日 学部研究会⑦高 11日 学部研究会⑦小・中	
12	9日 研究全体会④ ・研究経過共有 12日 公開研究会	9日 学部研究会⑧	12日 公開研究会提示授業(各学部)
1		27日 次年度に向けた検討	22日 初任者研修 研究授業 (生活単元学習 小1・2) 28日 初任者研修 研究授業 (遊びの指導 小1～3)
2	20日 研究推進委員会	13日 学部研究会⑩ 17日 次年度に向けた検討	
3	11日 研究全体会⑤ 下旬 研究紀要発行		

## IV 2年次の研究経過

2年次は、指導と評価の一体化を一層推進するために、年間指導計画や学習指導案の様式を改訂し（資料3、資料4）、授業づくりの仕組みを運用しながら各学部の授業実践に取り組んだ。各学部の取組の具体的な経過等については「学部研究」の頁に示す。

### 1 改訂した年間指導計画の作成と活用

年間指導計画は、扱う各教科等の種類と内容のまとまりを記載することで、年度で育成する資質・能力を可視化した。可視化により、各教科等を合わせた指導においても各教科等の目標を達成していくことや、バランスに考慮して指導内容を配列することへの意識の向上を目指した。

#### (1) 学部在籍期間で育成する資質・能力の確認

年間指導計画の作成開始に当たっては、指導段階に応じた内容を踏まえながら学部在籍期間内で計画的に指導を進めるために、観点別学習評価表の評価規準のうち、学部該当分を抜粋して一覧化し、内容を学部内で共有した。学部在籍期間で育成すべき資質・能力を再確認したことは、一人一人の指導内容や指導時期、指導時間数等の妥当性について考える機会となった。

#### (2) 年間の指導内容の整理と共有

年度で扱う各教科等の指導内容を配列し単元化する際は、新規単元のみならず、学年や学部の合同単元や行事の事前事後学習で扱う指導内容についても検討した。これまで、小学部や中学部の生活単元学習の合同単元等の計画立案は、学習活動の検討が中心で指導内容の整理までは十分になされていなかった。改めて、学部全体で指導内容の確認を行ったことで、指導段階によって育成する資質・能力が異なることを認識し、指導内容や学習活動を精選することができた。

### 2 授業づくりの仕組みを生かした単元計画と実践及び評価

指導と評価の一体化の推進に向けて、学習指導案の様式も改訂した。単元目標については活動目標を廃し、各教科等の目標（育成する資質・能力）を充てた。また、学習指導案の作成に関しては、単元観や指導観の検討に時間を要し、本時計画の検討が不十分であるといった課題があった。本時に係る検討を十分に行えるよう、既存の各教育計画の内容と学習指導案の項目を関連付けて転記する等の作成しやすい形式を考案し、授業づくりで注力すべき点を明確にした。

#### (1) 学びの履歴シートに基づく一人一人の学習履歴と指導段階及び育成する資質・能力の把握

各児童生徒の学習履歴と指導段階、育成する資質・能力については、担任と授業担当者間で確かに共有することが適切な評価と授業改善につながると考え、単元の構想の段階で一人一人の学習に係る実態把握の充実に努めた。年度の半ばで目標を達成する児童生徒もいたことから、学びの履歴シートを使用し、定期的に学習履歴や指導段階の把握を行っていくことの必要性を確認できた。

## (2) 単元の指導計画の検討

育成する資質・能力を単元目標としたことで、学習指導要領に示された例示や文部科学省著作教科書等を参考に、根拠をもって指導を進めようとする教師の意識が一層向上した。単元の指導計画については、小單元ごとに各教科等の内容のまとまりを具体化した。指導計画の立案を通して、目標達成に適した指導時数や学習活動であるか等、単元全体を踏まえた授業の検討を行うことができた。また、検討を進める中で、育成する資質・能力の三つの柱は単元全体を通して関連付けながら育成していくことの必要性を押さえた。

## (3) 単元における「個別の手立て」の在り方の検討

学習指導案上の「個別の手立て」は、児童生徒の障害の種類や程度等に応じた手立てを基本とし、個別の教育支援計画に記した合理的配慮や、自立活動に係る個別の指導計画に記した手立てを転記する形とした。授業づくりを進めた結果、一層確実に資質・能力を育成するためには、各教科等の目標達成に向けた個別の手立ての立案が必要であることを確認した。よって、年度後半の授業実践では、目標達成に向けた個別の手立てを設定する形とした。

## 3 児童生徒の「学び」を促すための授業展開や手立ての工夫

効果的な指導方法については、継続的な検討を進めた。2年次は、「学び」を促すための指導方法の在り方を重点的に検討した。年間を通して、設定した指導計画や授業展開、手立て等の有効性について段階的に検討した。

### (1) 本時の目標及びめあてや手立ての整理

年度の前半は、学習指導案（略案）の作成や年次研修の研究授業等を通して、授業者間で本時の目標及びめあてや「学び」を促す手立ての検討を行った。単元終了時に、設定した手立てが「参加」と「学び」のどちらに係る内容であったかを検証した。年度前半の時点では、各学部ともに「学び」を促すために設定した手立ての多くが「参加」に該当する内容であることが確認された。

### (2) 「参加」と「学び」を促す効果的な指導方法に関する研修会の実施

昨年度に引き続き、夏季休業中には学校長を講師とした「能代スタンダード研修会」を実施した。実践例を参考とした効果的な指導の進め方の確認や、日々の指導に生かせる教材作成に取り組んだ。研修会を通して、「参加」できる環境を整えた上で、目標や課題に応じた適切な指導方法を用いることが、「学び」を促すための前提となることを確認できた。

### (3) 「学び」を促すための指導計画や授業展開、手立ての工夫

年度の後半は、各学部で「学び」を促すための授業づくりに注力した。学びを実現するためには各教科等の見方・考え方を働かせた授業が重要であることを共通理解し、参考資料等でその内容を確認しながら、単元の指導計画や本時の手立ての検討を進めた。9月には、中学部2年の生活単元学習を対象に全校授業研究会を実施し、「生徒の学びを促すための各教科等の見方・考え方を取り入れた指導計画や授業展開の工夫」について協議した。

各学部の実践を通して、指導段階が複数にわたる学習集団での授業の場合は、具体的な指導内容の設定に難しさを感じる場面もあったが、指導内容や指導段階の明確化により手立ての充実が図られ、児童生徒の成長や変容につながった。

## V 全国公開研究会の実施

12月に、全国を対象とした公開研究会を開催した。知的障害特別支援教育や指導と評価の一体化に係る要点の理解や、本校の研究及び授業に対する改善点を明らかにすることを目的とした。具体的な内容については、「公開研究会<記録>」の頁に示す。

講評・講演の講師として、文部科学省初等中等教育局 特別支援教育課 特別支援教育調査官 加藤宏昭氏を招聘した。また、指導助言者として、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 研究事業部 総括研究員 武富博文氏を招聘した。両氏より御指導をいただいた助言の内容の一部について以下に示す（表2）。

表2 全国公開研究会における助言の内容（抜粋）

文部科学省初等中等教育局 特別支援教育課 特別支援教育調査官 加藤宏昭 氏
<p>□教育課程の編成</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・学習指導要領上の内容を確認せずに指導することは、公立学校としては偏った指導となる。学校の教育目標があり、教育課程があり、授業がどこに位置付いているかを把握して授業を行う必要がある。</li><li>・学習指導要領に示されている各教科等の内容はきちんと取り扱う。安易に、先生方が独自の判断で取り扱わないことがあると、子どもは学ぶ機会を失ってしまうことになる。</li></ul>
<p>□単元目標</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・各教科等を合わせた指導は指導の形態であり、目標や内容を有しているものではない。「単元目標」と示す場合、学習指導要領における各教科等の目標と、活動上の目標を区別すること。活動目標では評価ができないことを理解する。各教科等の目標が必ず必要となる。</li></ul>
<p>□学習評価</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・学習評価については、日々の授業の中での児童生徒の学習状況を把握し指導の改善に生かすことに重点を置くことが重要であり、評価をして終わりではない。評価をするということは、それを次の指導に生かしていくということ。能代支援学校でも、どのように評価をしていくのか、計画を立てることが非常に重要となる。</li><li>・12年間を通して「本校ではこのような学びを進めていく」という特別支援学校版の各教科等の指導計画を作成する必要がある。学校としての全体的な指導計画に基づき、学年や学習グループでの各教科等の指導計画を作成・評価を行う。各自の授業や学年の指導計画が、学校としての指導計画のどの部分に当たるのかを説明できるようにする必要がある。</li></ul>
独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 研究事業部 総括研究員 武富博文 氏
<p>□授業づくり</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・授業づくりや単元づくりの中で、「習得・活用・探求」という学びのプロセスをつくる。ポイントは、子どもたちが解決していく「問い」や「課題」の設定である。「問い」は子どもと一緒に共有していくことが大切。あるいは、子どもたちの問いを授業の中で作り上げていくことが大切。</li><li>・単元計画に、道徳科や自立活動の内容がどう関連付いているのか。子どもたちの全人的な発達を促すことが大切。教科を扱うことは重要だが、道徳や自立活動、特別活動も重要である。全体のバランスを見ながら単元を考えること。</li></ul>
<p>□各教科等の見方・考え方</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・「習得・活用・探求」の中で働かせるものが、各教科等の見方・考え方である。また、「習得・活用・探求」は、一方向で進むものではなく、相互の関係である。</li><li>・深い学びと各教科等の見方・考え方は、切り離せない関係にある。この点を顕在化させることが、今後の能代支援学校の授業づくりの更なる発展となる。</li><li>・各教科等の見方・考え方は、物事を捉える視点や考え方であり、大人になり生活していく上でも重要な働きをするものと言われている。生活の中で各教科等の見方・考え方を働かせられるような単元構成にしていくことが重要。</li><li>・知的障害のある子どもたちは、各教科等の見方・考え方を働かせる部分が難しいという状況もあるため、自立活動の視点を入れていくことが必要。</li></ul>

公開研究会終了後は、これらの内容を全校で共有し、授業づくりの仕組みの再検討や「学び」を促すための指導方法の整理を進めた。

本校では今年度、2か年の研究のまとめとして全国公開研究会を実施し、研究及び授業に係る評価と改善の機会を得た。考案した授業づくりの仕組みの大枠については、自校で作成した観点別学習評価表（学びの履歴シート）を基盤に、根拠と一貫性をもって指導と評価の一体化を推進するという点において一定の評価をいただいた。一方、学習指導要領に基づき、確かな指導を行うためのよりよい教育体制の構築や授業実践に関しては、改善が必要な点があることも明らかとなった。

研究を開始した令和5年度の当初は、各教科の目標の達成や評価規準の設定、指導と評価の一体化の定義等、各教科等を合わせた指導の在り方や学習評価に関する全校での理解共有を進めることが優先的課題であった。昨年度は、研究内容の理解共有を促し、実践を通じた検討や協議を重ねる中で、単元や授業において活動目標を廃すといった指導の転換を図った。今年度は、指導と評価の一体化を図るための授業づくりの仕組みを試行する中で、各教科等を合わせた指導においても各教科の目標を達成するという点について、実感を伴った理解ができた。先進校の事例を参考としながらも、本校として活用しやすい様式や体制を考案したことで、児童生徒の「学び」の可視化と確かな成長を育むための授業づくりが促進されたと考える。

以下に今年度の成果と今後の展望を示す。

### 1 成果

#### (1) 観点別学習評価表の活用による、育成する資質・能力の明確化

指導と評価の一体化を目指し、年間指導計画や学習指導案の様式を改訂したことは、単元や本時で育成する資質・能力の明確化に直結した。観点別学習評価表に示した各教科等の評価規準も全校での共有が図られ、各教師は根拠のある確かな目標と評価規準を設定し授業検討や授業実践を進めることができるようになった。

#### (2) 資質・能力の育成に迫る単元計画の検討と改善

育成する資質・能力を単元目標として定めたことと、単元で育成する資質・能力の別を精選したことにより、単元の指導計画や本時目標の精度が増した。授業においては、本時計画に係る検討の時間確保により内容の充実が図られた。学習活動の検討や環境の調整、手立ての修正や再考を十分に重ねたことで、児童生徒一人一人の資質・能力の育成に迫ることができたと考える。また、「学び」を促すための効果的な指導方法に関しても、単元計画時の検討や授業後の協議、学部研究会を通して、その考えを深めることができた。

#### (3) 仕組みの考案による指導と評価の一体化と「能代スタンダード」の推進

授業づくりの仕組みは、指導と評価の一体化を進めるための手順として運用した。考案した仕組みは各教育計画と関連付ける等の工夫により、日々の指導の流れに即した日常的な活用と、指導と評価の一体化の推進を図ることができた。公開研究会の参加者アンケートや本校学校評価の内容から、校内外において仕組みとその活用に関する有効性が認められたと考える。特に校内においては、公開研究会の実施を経て、指導と評価の一体化と資質・能力の育成が推進されたと評価する教師が増えた（次頁※4）。

効果的な指導方法を集約した「能代スタンダード」（資料5）についても、年間指導計画の評価との関連付けや各授業実践を通して活用が進んだ。



#### ※4 日常的な運用に向けた職員アンケート等の結果について

##### ○教育計画等の変更による効果と負担に関するアンケート（令和6年7～8月、令和7年2月 年2回実施）

『個別の指導計画の様式変更により、対象児童生徒の「育成を目指す資質・能力」「指導段階」が明確になりましたか』について、7・8月は約87%の教師が「明確になった」と評価し、2月には97%に増えた。 [評価基準：①明確になった ②不明確になった ③変わらない]

##### ○令和6年度 学校評価（令和6年9月、令和7年2月 年2回実施）

『観点別学習評価表の活用による指導と評価の一体化と「学びの履歴」を踏まえた資質・能力の確かな育成』について、9月は約26%の教師が「よく推進されている」、約73%の教師が「推進されている」と評価した。2月には、「よく推進されている」と評価した教師が約41%に増えた。

[評価基準：①よく推進されている ②推進されている ③十分推進されていない ④推進されていない]

## 2 今後の展望

### （1）学校の全体的な指導計画に基づく授業づくりの仕組みの確立

学習指導要領に基づき、12年間で確実に資質・能力を育成するためには、各教科等の全体的な指導計画を作成する必要があるが、この点については、本校の授業づくりの仕組みにおいて未達成の部分であった。各教科等を合わせた指導の授業時数については、各単元の総時数の検討が中心で、単元で扱う各教科等の時数配当の確認までは至っていなかった。研究のまとめではこのことを受け、学校の全体的な指導計画に基づき、資質・能力をより計画的に育成するために、各教科等の「標準年間指導計画」（資料6）の作成に着手した。全校で教科別のワーキンググループを設定し、12年間で育成する資質・能力の指導順や時数、指導の種別等についての検討を進めている。今後は「標準年間指導計画」を整備し、学校全体の指導計画に基づいた新たな授業づくりの仕組みの運用を図りたい。

### （2）各教科等の見方・考え方を働かせる等、「学び」を促す授業の実践

年間を通して、授業においては児童生徒の「学び」を促すための効果的な指導方法の検討を重ねたことで、各教科等の見方・考え方を働かせることの意義についての理解が進んだ。しかしながら、「習得・活用・探求」の学びのプロセスづくりや「問い」の設定については、検討を重ねたが難しさを感じる教師もまだ多い。また、各教科等を合わせた指導においては、自立活動や特別活動等の指導内容も関連付けて扱うことの重要性も確認した。今後は、深い学びにつなげていくための要点の理解と授業技術の向上を目指した研修機会を設定しながら、資質・能力を確実に育成できる授業づくりを推進したい。

### （3）授業づくりの仕組みを活用した、全教師での実践の蓄積

授業づくりの仕組みにおいて、ツールとして関連付けた各教育計画に関しては、作成のしやすさや内容の分かりやすさが評価されたが、授業実践の期間が短く、全教師による授業づくりの仕組みの一連の活用と実践までには至らなかった。学習指導案を作成した教師らの多くは、様式改訂により「指導案を作成しやすくなった」「自身の考えを整理しやすくなった」等と評価したことから、これらの仕組みの有効性を共有しながら全校単位での実践を蓄積し、日々の授業における指導と評価の一体化の定着を図りたい。

## 参考文献

文部科学省（2018）特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 総則編（幼稚部・小学部・中学部）

文部科学省（2018）特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編（小学部・中学部）

文部科学省（2018）特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編（幼稚部・小学部・中学部）

文部科学省（2019）特別支援学校学習指導要領解説 総則等編（高等部）

文部科学省（2019）特別支援学校学習指導要領解説 知的障害者教科等編（上・下）（高等部）

丹野 哲也（2022）「各教科等を合わせた指導」の意義と課題－育成を目指す資質・能力と指導の形態－. 発達障害研究第44巻

全日本特別支援教育研究連盟（2023）これからの特別支援教育はどうあるべきか. 東洋館出版社

分藤 賢之 編著、菅野 和彦・加藤 宏昭・奥住 秀之 著（2023）年間指導計画システムの理念と実践 知的障害教育スタンダード. ジアース教育新社

福島県立相馬支援学校（2023）知的障害特別支援学校のカリキュラム・マネジメントと単元研究「学習指導要領の着実な実施を目指して」. ジアース教育新社

# 学部研究

---



## I 学部研究の概要

### 1 研究対象と研究グループ

- ・生活単元学習を研究対象とし、今年度は1・2年、5年の授業検討や授業分析に取り組んだ。
- ・研究グループは、各学年・学級を中心とし、内容に応じて、学部縦割りの各学年混合グループで取り組んだ。

### 2 年間計画

今年度の取組内容と実施時期は以下のとおりである（表1）。

表1 小学部の取組内容と実施時期

時期	内容
5月	・小学部段階で育成する資質・能力の整理と共有
6月	・各学年・学級で育成する資質・能力の検討（年間指導計画の作成） ・授業の目標や手立ての検討と共有（略案の作成）
7月	・授業の評価と改善策の検討（手立ての整理）
8月	・学部内授業研究会（5年）
9月	・資質・能力を育むための単元及び学習内容の検討（1・2年）
10月	・学部内授業研究会（1・2年）
11月	・資質・能力を育むための単元及び学習内容の検討（1・2年）
12月	・公開研究会（1・2年）
1月～2月	・小学部研究のまとめ

## II 学部研究の経過

### 1 年間指導計画の作成と活用

観点別学習評価表から抜粋した小学部段階で育成する資質・能力の一覧と、学習指導要領解説（各教科等編）の目標・内容の一覧、小学部の今年度の年間計画指導計画案を相互に確認しながら、年度で育成する資質・能力と学習活動を検討、整理し、学部全体で共有した。整理した内容は、次頁表2に示す。

小学部合同の生活単元学習として扱う指導内容と学習活動が整理されたことで、学年・学級の生活単元学習で扱う指導内容と学習活動の検討がしやすくなったとの意見が挙げられた。各学年・学級の生活単元学習で扱う指導内容の配列に当たっては、「資質・能力を確実に育む」ためにバランスよく配列することを学部全体で共有した。指導内容を絞ること、学習活動の展開、適切な時数の設定などについては、難しさを感じる教師が多かった。

表2 今年度の小学部合同生活単元学習で扱う各教科と指導内容

単元名	各教科と指導内容
新入生を迎える会	〈生活〉遊び、人との関わり、役割
思い出の森で学ぼう	〈生活〉人との関わり、生命・自然
農業技術センターとの交流（さつまいもの苗植え、さつまいも掘り）	〈生活〉生命・自然 〈算数〉数量の基礎、数と計算、測定
交通安全教室	〈生活〉安全
宿泊学習（4・5年）	〈生活〉基本的生活習慣、安全、日課・予定、役割、きまり、社会の仕組みと公共施設、生命・自然
修学旅行（6年）	〈生活〉金銭の扱い、きまり、社会のしくみと公共施設
結団式、報告会	〈国語〉聞くこと・話すこと
向能代小との交流	〈生活〉遊び、人との関わり
学校祭	〈国語〉聞くこと・話すこと
能代市産業フェア	〈図画工作〉表現 〈生活〉遊び、ものの仕組みと働き
ありがとうまつり	〈生活〉人との関わり、役割、手伝い・仕事、生命・自然
卒業生を送る会	〈生活〉遊び、人との関わり、役割
卒業式練習	〈生活〉基本的生活習慣
修了式練習	〈音楽〉歌唱、鑑賞

## 2 単元計画の検討

7月に、一人一人の学びの履歴シートに基づき、指導段階及び育成する資質・能力を踏まえ、単元の目標や学習活動、手立ての妥当性について、各学年・学級で検討した。

9月から10月は、1・2年「きせつとあそぼう～あき～」の単元を対象に、単元計画を検討した。単元の指導内容は、生活科（生命・自然）、図画工作科（表現）を選定した。学びの履歴シートに基づいて一人一人の学習履歴と指導段階及び育成する資質・能力を確認する中で、児童によっては、指導段階を見直した。検討においては、指導内容を具体的にし、何を学ばせたいかを明確にすること、児童の疑問を学びにつなげること、教科の見方・考え方を働かせることが課題として挙げられた。

11月から12月は、1・2年「きせつとあそぼう～ふゆ～」の単元検討を行った。単元の指導内容について、検討開始の時点では生活科（生命・自然）、図画工作科（表現）を扱うこととしたが、その後、具体的な指導内容の確認や、資質・能力を育成するための適切な学習活動に関する検討を重ねる中で、生活科「ものの仕組みと働き」も指導内容として加えた。検討の詳細については、後述する。

## 3 学びを促すための授業展開や手立ての検討

7月に、各学級・学年の生活単元学習の授業を対象に、本時目標を達成するための手立てについて検討した。検討を通して、目標を明確にすることで手立てや学習活動が絞られることを確認した。授業後の指導の評価では、「参加」を促す手立てか、「学び」を促す手立てか、どちらの手立てであるかについて各自整理した。併せて、目標の達成に向けて、特に必要な手立てについては改善策を検討した。7月時点の学部全体の傾向として、参加を促すための手立てが中心であること、学びを促す手立てがより必要であることが確認された。

8月は、学部内授業研究会（5年「じゃがいもハッピーパーティーをしよう」）を通して、単元や授業の検討を行った。単元の指導内容は、生活科（手伝い・仕事、生命・自然）、算数（数と計算）を扱うこととし、本時では、算数（数と計算）の目標を設定した。事後研究会では、

目標を達成するための適切な学習活動を設定することや、ねらいに沿ったためあてや発問、環境設定等の参加と学びを促す手立てが話題として挙げられ、その重要性について学部全体で共有した。

12月には、公開授業研究会（1・2年「きせつとあそぼう～ふゆ～」）を通して単元や授業の検討を行った。単元の指導内容は、生活科（生命・自然）、図画工作科（表現）を扱うこととし、本時では生活科（ものの仕組みと働き）の目標を設定した。公開授業研究会の授業において工夫した点については、後述する。

### Ⅲ 授業づくりの実際

#### 公開研究会 提示授業

小学部1・2年 生活単元学習 単元名「きせつとあそぼう ～ふゆ～」

#### 1 単元の検討

単元設定においては、この単元で育てたい資質・能力が生活科（生命・自然）、図画工作科（表現）であることを確認し、具体的な指導内容や、資質・能力を育むための適切な学習活動について検討を重ねた。

検討を重ねる中で、冬の風物詩「凧揚げ」は、「冬は寒い、風が強い」ことを学ぶことができるだけでなく、「風が物を動かすこと」についても学ぶことのできる学習内容である、という教師の気付きにより、生活科（ものの仕組みと働き）も加えて選定することとした。検討において挙げられた主な意見は以下のとおりであった。

- ・凧を作って揚げることを繰り返す中で、楽しみながら風の働きについて学べるのではないか。
- ・袋に風を集める、風になびく様子が分かりやすい凧を作るなど、様々な種類の凧を扱うことで、風の働きが分かりやすいのではないか。
- ・天候が悪い際には活動場所を変えることで、天候の変化に関心がもてるのではないか。その際、送風機やうちわ等を使って学ぶことができるのではないか。

これらを踏まえ、凧揚げを通して、冬の「気候の特徴」や「風の力によって物が動く」ことについて知ることの他に、天候や衣服の調整への関心が高まり、生活に生かす姿を期待して単元を展開することとした。

#### 2 本時の検討

本時は、生活科（ものの仕組みと働き）を目標とし、授業づくりを進めた。工夫した点については、以下のとおりである（表3）。

表3 本時の授業における工夫点

- (1) 児童が期待感をもって取り組める授業展開  
授業の流れを、①天候（天気と風）の確認、  
②凧が揚がるかについての予想、③凧づくり、  
④凧揚げ、⑤結果の振り返りとした。  
→凧揚げを楽しみに繰り返し取り組むことで、経験をもとに予想できるようになった。



凧揚げの様子

## (2) 児童の思考の促し

- ・めあての提示では、「今日は凧が揚がるかな」と問い掛け、凧と風の間を考へられるようにした。
- ・導入では、凧と風の間を気付けるよう、風を確認した上で凧が揚がるか予想する場面を設定した。
- ・展開場面では、凧揚げをしている児童の考を促すため、「どうやって凧を揚げたの」「どんなときに高く揚げたかな」など、風の働きに注目できるような言葉掛けや発問を工夫した。



児童の考を促す導入

## (3) 天候（風、気温）の可視化

- ・風の有無や強弱に気付くことができるように、外に吹き流しを設置し、自分で確認できる環境を整えた。
- ・毎朝の活動として、毎日の風を調べてカードを掲示、気温を調べて記入し、発表場面を設定した。  
→天候への関心が高まり、日々の生活に生かそうとするようになった。



風の可視化（吹き流し）

## 3 児童の変容

提示授業および単元全体を通して見られた児童の成長や変容は、以下のとおりである。

- ・凧を持って走ることを楽しんでいた児童は、走っていないのに凧が動く様子を見つけ、「なんで、たこが動いている」と発言するなどの変化が見られた。
- ・窓から凧を出し、風に揺れる様子を楽しみにしていた児童は、風のない日に凧が動かないことに驚き、教師の手をとり、再び試す姿が見られた。
- ・単元開始当初は、凧揚げの予想場面で、凧が揚がってほしいという願いから「たこ、あがるよ」と話すことが多かった。徐々に風の間を気づき、「風があるから、たこがあがる」「体育館は、風がないからあがらない。走ってあげる。」などと話すようになってきた。
- ・単元開始当初は、「晴れだから、外でたこあげができる」「雨だから外には行けない」という発言が多かった。単元の後半には、風と凧の揚げり方の間が分かってきて、「風がすごい、今日は外に行けない」と発言するなど、風を判断基準に活動の可否を考へるようになった。
- ・雷注意報により屋外へ行けなかった日を経験した後は、別日に同様の空模様を見て、雷がなりそうだと予想し、学習以外の日常の場面においても、外へ行かない選択をするようになった。

## IV 学部研究のまとめ

育てたい資質・能力を明確にした単元設定や本時の目標設定、資質・能力を育むための適切な学習活動、児童の考に沿った授業展開、児童の気づきを促す発問や言葉掛けが、児童の変容につながった。また、教科の指導内容を具体化することや、教科の見方・考え方を踏まえた手立てを検討することが、学んだことを日常生活に生かす児童たちの姿につながった。一方で、指導内容の具体化や、教科の見方・考え方を生かした手立ての検討には時間を要し、難しさがあつた。それらの理解を深め、年間を通してより確実に資質・能力を育成するための単元構成や授業実践を積み重ねたい。

## 中学部の研究

### I 学部研究の概要

#### 1 研究対象と研究グループ

- ・ 中学部では生活単元学習を研究対象とし、今年度は1年、2年の授業づくりに取り組んだ。
- ・ 研究グループは学部全体とし、内容に応じて各学年やグループでの検討を行った。

#### 2 年間計画

今年度の取組内容と実施時期は以下のとおりである。(表1)

表1 中学部の取組内容と実施時期

時期	内容
5月～6月	・ 中学部段階で育成する資質・能力の共有 ・ 各教科等を合わせた指導で扱う指導内容の検討
7月～8月	・ 指導案(略案)の作成(全学年) ・ 単元目標の達成に向けた指導計画の検討① ・ 単元目標の達成に向けた授業展開及び手立ての工夫①
9月～10月	・ 全校授業研究会(2年)・学部授業研究会(1年) ・ 単元目標の達成に向けた指導計画の検討② ・ 単元目標の達成に向けた授業展開及び手立ての工夫②
11月～12月	・ 公開研究会(2年) ・ 単元目標の達成に向けた指導計画の検討③ ・ 単元目標の達成に向けた授業展開及び手立ての工夫③
1月～2月	・ 単元目標の達成に向けた授業展開及び手立ての工夫④ ・ 中学部研究のまとめ

### II 学部研究の経過

#### 1 年間指導計画の作成と活用

5月に、観点別学習評価表から抜粋した中学部段階で育成する資質・能力の一覧表を使用し、各学年の生活単元学習と日常生活の指導、学部縦割りの作業学習で扱う指導内容を検討した。主に社会科、理科、職業・家庭科について確認し、その他の教科については合わせた指導で取り扱うことが望ましいものについて確認を行った。

6月に、実施した学部合同の学習や行事単元(宿泊学習、修学旅行)における指導内容の整理と共有を行った。特に1・2年生合同の宿泊学習については、社会科と理科の指導内容から単元目標を設定し、実際の学習活動の改善につながった。

5月に確認した中学部段階で育成する資質・能力の一覧表を使用し、5月末に各学年の生活単元学習の年間指導計画を作成した。いつ、どの各教科等の指導内容を取り扱うか検討して作成することで、各学年の中心単元(表2)及び進路学習で育成する資質・能力の明確化を図った。

表2 今年度の各学年の単元名と主な指導内容

学年	単元名	主な指導内容
1年	中1元気プロジェクト (夏祭りへの出店など)	社会科[社会参加ときまり]職業・家庭科[家族・家庭生活]
2年	中2お米食堂 (学校米のPRなど)	社会科[産業と生活]理科[季節と生物]職業・家庭科[衣食住の生活]
3年	中3地域を元気にしよう (モルック体験など)	社会科[外国の様子]理科[物質・エネルギー]職業・家庭科[情報機器の活用]



## 2 単元計画の検討

学びの履歴シートを元に、各学年の一人一人の学習履歴と指導段階を確認し、年間指導計画と照らし合わせながら単元において育成する資質・能力を確認した。単元の目標は観点別学習評価表から記載すること、単元の評価規準は目標に準拠していることを学部全体で共有しながら学習指導案の作成を行った。

単元目標を達成するために、学習指導要領に記載されている具体的な指導内容を確認し、小単元で扱う各教科等の指導内容の配列を検討した。加えて、「深い学び」の実現を目指して、習得した知識・技能を活用して考える、表現する、調べるといった流れを取り入れた学習活動の展開の工夫を図った。取り上げる指導内容によっては中学部一段階しかないものもあり、より学びを深められるよう、単元の組み立て方をさらに工夫する必要があることが確認された。

一人一人の学習履歴や異なる指導段階の生徒が所属する学習集団において単元目標を達成するために、「個別の手立て」について検討を行った。自立活動の指導内容を取り入れながら、単元目標達成に向けた具体的な手立てを各学年、学部全体で考えたことで、単元全体を通じた学習活動の工夫や発問の内容の工夫へとつながった。

## 3 「学び」を促すための授業展開や手立ての検討

7月の学習指導案（全学年対象）、9月の全校授業研究会に向けた学習指指導案（2年対象）、10月の学部授業研究会に向けた学習指導案（1年対象）、12月の公開研究会に向けた学習指導案（2年対象）の作成や授業研究会を通して、本時の目標及びめあてについて検討した。活動の目標とならないよう、単元目標に基づきながら何を指導するのか検討して、本時で育成を目指す資質・能力の焦点化を図った。

また、全校授業研究会及び公開研究会提示授業（2年）の検討と実践を通して、「学び」を促すための授業展開や手立てについて検討した。各教科の見方・考え方を働かせることで深い学びが図られることを学部全体で共有し、主に理科、社会科の見方・考え方を働かせた授業展開について考えた。生活との関連付け、比較等のポイントを押さえることで学習活動や手立てが整理されこれまでの生活単元学習の授業展開を改善した。

## Ⅲ 授業づくりの実際

### 公開研究会提示授業

中学部2年 生活単元学習 単元名「中2お米食堂～学校米のPRをしよう～」

### 1 単元の検討

提示授業である2年生活単元学習「中2お米食堂～学校米をPRしよう～」については、学部全体で授業づくりに取り組んだ。学びの履歴シートと年間指導計画を基に、単元で扱う指導内容を社会科1段階「産業と生活」、職業・家庭科の家庭分野「衣食住の生活」とした。また、秋田県の主な農業であり、本校に実習田があり学校米の田植えや稲刈りを行っていること、食生活の関連を考えられることから、米づくりを題材として取り上げることとした。

指導計画の立案では、小単元で扱う指導内容を学習指導要領から確認した。稲の成長では「地形や気候などの自然条件との関わり」、米づくりの作業では「生産の仕事に携わる人々」、「機械や道具の工夫」、収穫した米が食卓に届くまでについては「食の安全の確保のための努力」、「簡単な調理の仕方や手順、調理計画」と扱う指導内容を踏まえて小単元を考えることで、単元目標のどのあたりを指導、評価するか明確化できた。

「学び」を促す授業展開を図ることができるように、小単元の配列について検討した。学校米のPRをするという課題の解決に向けて、稲の成長や米づくりについて調べて知ったことを生かしてパンフレットづくりやパッケージ化を図るといった、知識・技能の習得と活用の流れを設定できた。



「食の安全」の指導内容を踏まえて実施した検査体験



これまでの学習をまとめたパンフレット

## 2 本時の検討

本時目標及びめあてについては、学校米の販売に向けてどのような状態まで精米するか考えることで、収穫された米が食卓に届くまでに精米の工程があること、白米を食べている人が多いが玄米などの他の精米の種類で食べている人もいること、といった生産に関する仕事と生活との関わりを知り、考えることを主眼に置くようにした。

学びの履歴や指導段階、自立活動の指導内容を踏まえて、単元における「個別の手立て」を検討した。本単元では、社会科1段階「産業と生活」から、米の生産と自分や地域の人々の生活についての関連を考えるための手立て、職業・家庭科の家庭分野1段階「衣食住の生活」から、調理への関心をもち安全で適切な調理計画の立案をするための手立てを一人一人に合わせて考えることで、「学び」を促す授業展開を支える本時の手立てを工夫できた。

模擬授業を通し、「深い学び」へとつながる各教科の見方・考え方を取り入れた授業展開について検討、協議した。本時において、導入【家庭で食べている米調べによる自分の生活との関連付け】、展開【精米の体験による玄米、白米、分つき米の比較】【玄米、白米、分つき米の食べ比べ】、まとめ【比較したことを生かした関連付け、総合して販売する学校米の精米の種類を考える】と社会的な見方・考え方を働かせられるように学習活動を設定した。



板書の工夫（米づくりの工程と本時の関連が分かる）



活動の工夫（玄米、白米、分つき米の食べ比べ）

### 3 生徒の変容

提示授業及び単元全体を通して見られた生徒の変容は以下のとおりである。

- ・生徒からは給食の献立表を見て学校産のものや秋田県産のものがあることに注目する様子や「残さず食べなきゃな」と話す様子が見られるようになってきた。
- ・家庭で食べている米について調べたり、まとめたりすることで、当たり前前に食べている米について考えることにもつながった。
- ・小単元「稲の成長について」では、これまで学級畑で育てた野菜と同じところと違うところを考える、水や栄養、温度について着目するといった姿が見られるようになってきた。
- ・稲が倒れていて穴のようになっていく様子（倒伏）を見て、「どうしてこうなっているんだろう」と疑問をもつことで、米づくりの作業の必要性や工夫について考えようとする様子が見られてきた。
- ・農業倉庫の見学や検査の体験等を通して、食の安心、安全との関連付けを図ることができてきた。

## IV 学部研究のまとめ

### 1 「学び」を促すための授業展開

単元の検討において、小単元において指導する内容を学習指導要領から整理し、それを踏まえて具体的な学習活動を設定したことで、「学び」を促すための指導計画を考えられた。加えて、単元において解決する課題を設定し、習得した知識・技能を活用する小単元の配列を行うことで、「深い学び」につながった。

公開授業研究会における本時の検討では、「精米の仕方が分かり、協力して学校米を考える」といった目標ではなく、「米づくりの工程の中に精米があること」「普段食べている米は精米されていること」といった各教科等の指導内容を踏まえて、単元目標から本時の目標を具体化する考え方を共有できた。また、目標を達成するために、各教科等の見方・考え方を働かせる授業展開を検討した。今回は社会科の見方・考え方を働かせられるように学習活動を精選した。精米をするだけではなく、精米の工程を行っている人がいることに気付く、精米の様子や精米された米を見て比較する、自分の食生活と関連付ける、といった「学び」を促す授業展開を検討できた。

### 2 「学び」を促すための手立て

学びの履歴、指導段階、自立活動の指導内容を踏まえて、一人一人の単元目標の達成に向けた「個別の手立て」を検討することで、単元及び本時における「学び」を促すための具体的な手立ての設定につながった。公開授業研究会における単元では、社会科1段階「産業と生活」から生産の仕事と地域の人々との関わりが分かって表現できるように、「個別の手立て」として生産に携わる人々の工夫や努力を考える場面設定を多く取り入れた。それにより、検査は食の安全、安心のために行っていることや秋田県、能代市の米づくりについて、本校の実習田による米づくりについて意欲的に調べ、地域の人々や自分の生活との関連を考えるといった変容が見られるようになった。

## I 学部研究の概要

### 1 研究対象と研究グループ

- ・作業学習を対象とし、今年度は縫製班、総合サービス班の授業づくりに取り組んだ。
- ・研究グループは各作業班を中心に、内容に応じて各学年での検討を行った。

### 2 年間計画

今年度の取組内容と実施時期は以下のとおりである。(表1)。

表1 高等部の取組内容と実施時期

時期	内容
5月	・高等部段階で育成する資質・能力の確認
6月	・年間指導計画の指導内容や学習活動の妥当性の検討 ・授業の目標や手立ての検討と共有(略案の作成)
7月	・授業の評価と「参加」と「学び」を促すための手立ての整理
8月	・学部内授業研究会(総合サービス班)に向けた指導案(正案)検討
9月	・縫製班の授業検討①(生徒にあった有効な手立ての検討)
10月	・学部内授業研究会(総合サービス班)
11月	・縫製班の授業検討②(学習指導案の確認)
12月	・公開研究会(縫製班)
1月～2月	・「学び」を促すために有効な手立ての共有 ・高等部研究のまとめ

## II 学部研究の経過

### 1 年間指導計画の作成と活用

観点別学習評価表より抜粋した、高等部段階で育てる資質・能力一覧を使用し、各教科の指導内容と各作業班で行う学習活動の妥当性について確認した。確認により、各教科の指導内容と学習活動とのつながりを作業学習担当者間で押さえることができた。また、学級担任を中心に選定、作成した個別の指導計画と、作業学習の担当者が作成した年間指導計画の整合性についても確認した。確認した結果、育成する資質・能力によっては、所属する生徒の指導段階が異なっていたケースもあった。作業学習班は学部縦割りによる学習グループで実施するため、所属する生徒の個別の指導計画の内容については、事前に十分に作業学習担当者と確認し、共有する必要があることを学部全体で共通理解した。一連の確認は、年間指導計画の見直しにもつながった。

### 2 単元計画の検討

8月から10月は、総合サービス班「よりよいサービスの提供を目指そう1」を対象に単元検討を行った。数学科の資質・能力を育むために、学習活動として、カフェ営業における商品の仕入れ個数と売り上げ個数の整理を行う活動と、その結果を基に学校祭営業に向けた商品の仕入れ個数の検討を行う活動を設定した。学級担任や数学の授業担当者と学習指導案の検討を進めたことで、所属する生徒の数学科の細かな既習事項や「〇〇があればできる」などの個別の学習状況と配慮点を把握することができた。このことは、実態に即した目標の設定と指導内容の改善につながった。また、学習状況を把握したことで、単元構成においても、小単元で学習する指導内容

のつながりを意識することができた。

9月から12月は縫製班「新製品の開発～次年度に向けて～」を対象に単元検討を行った。単元では、高等部職業科「A職業生活 ア勤労の意義」、家庭科「B衣食住の生活 エ布を用いた製作」を扱った。当初は、既存の製品改善を行う活動も小単元として組み込んでいたが、本単元の目標である職業科「A職業生活 ア勤労の意義」を効果的に達成することができるよう、新製品の開発に焦点を絞って指導計画を立て直した。縫製班で検討した具体的な内容については後述する。

### 3 「学び」を促すための手立ての検討

#### (1) 定期的な手立ての検討

10月に実施した総合サービス班の授業研究会では、学びを促すための効果的な手立てについて協議を行った。成果と改善は以下のとおりであった。(○：成果 ◇：改善)

- 互いの考えを共有する場面の設定
- 自力思考の時間確保
- ◇ペアでの話し合い活動の設定
- ◇手がかりや焦点化した条件の提示
- ◇ICT機器の活用（金額や個数を表や棒グラフなどで表す、操作性のある教材の開発）

協議後は各作業班に分かれ、生徒の学びを促すための手立てを検討する時間を設定したことで、実際の授業と関連させながら各生徒の手立てを具体的に検討することができた。

また、各教科学習の場面における「学び」の手立てを、作業学習の授業づくりに反映させることをねらいとし、学年を単位としたグループで、縫製班にする生徒（抽出生徒5名）の手立ても検討した。挙げられた手立てを以下に示す。

- ・作業の効率性を本人が考える学習場面の設定
- ・縫い方やアイロンのかけ方、手順等を検証する学習活動の設定
- ・製作に関係する長さの数値化と提示（基準を明確にするため）
- ・生徒の思考を促すための発問の工夫（選択肢の用意、思考の道筋に沿った質問をする等）

#### (2) デジタル作業日誌の使用

昨年度から検討と試行を進めているデジタル作業日誌の使用（※1）も有効な学びの手立ての一つとなった。デジタル作業日誌は、生徒自身で自己評価を重ね、自己の成長や学びを実感できるツールとして作成したもので、今年度は生徒を抽出し、9月から運用を開始した。

教師からは、「生徒が自分で判断して、気に留めておきたいことを写真で記録するようになった。」「これまでは書くこと自体に時間がかかっていたため、デジタル日誌のほうが早くまとめることができていた。」「学級担任と即時共有できる。」など肯定的な感想が多かった。また、使用した生徒の感想として、「作業の写真を撮って残せていい。」「手書きより時間がかからない。」「デジタル作業日誌のほうが目標や振り返りの言葉が浮かびやすい。」等が挙げられ、生徒自身もデジタル作業日誌のよさを実感できていた。

### Ⅲ 授業づくりの実際

公開研究会 提示授業

高等部 作業学習 縫製班 単元名「新製品の開発～次年度に向けて～」

#### 1 単元の検討

単元検討は、学習指導要領解説各教科等編の目標・内容を再確認しながら進めた。本単元で育てたい資質・能力を育むために、「お客様アンケート」から得られた顧客のニーズを基に、試作・話し合い・改善を繰り返し行うこととした。一連の活動を繰り返すことで、「お客様のために作業をしている」という意識付けを図れるようにした。生徒たち自身が実感できるように、改善したポイントや試作したバッグを掲示することとした。

製品の社会的な有用性を実感できるように、製品の試作後は、教師や保護者にモニターを依頼し、製品を評価してもらった場面と、身近な人たちから使用した感想を聞く機会を設定した。

#### 2 本時の検討

顧客のニーズに即した製品づくりができるように、毎時間、製作の前に試作した製品を評価する場面を設定した。評価場面では、できるだけ生徒同士で評価することができるように、評価項目を可視化した評価シート（※2）や、進行表を活用することとした。

また、製作を通して「勤労の意義」を理解したり、生徒が実感したりすることができるように、生徒への言葉掛けの仕方について検討した。勤労の意義の一つである「他者への貢献」に焦点を当て、導入とまとめの場面で、個々の作業が次の工程につながり、それらは作業全体への貢献にもつながっていること、さらに、自分たちが製作した製品がお客様の満足と喜びへの貢献につながっていることを、生徒たちに分かりやすく伝えることとした。生徒全員が理解できるように、「貢献」という言葉は「人の役に立つ」「お客様が満足する」「喜んでくれる」等に置き換える工夫を図った。

#### 3 生徒の変容

提示授業及び単元全体を通して見られた生徒の変容は以下のとおりである。

- ・製品の評価場面では、「A4の書類が入るサイズ」という項目に対して、「物が入ったから○（まる）」のみで終わらず、「物の取り出しやすさは×（ばつ）だから、もう少しサイズを改善しよう」といった意見が出るなど、お客様の目線に立って製品を考えることができるようになってきた。
- ・製品づくりを分業化したことで、次の工程の人が作業しやすいよう、正確かつ丁寧な作業を意識して取り組もうとする様子が見られるようになった。

学年/学期	期別	科目	単元	授業内容
12	月5	日(水)	3	校時→6 校時
作業内容 午前→水やすりと輪がけ 午後→色々な形の小皿チャレンジ				
評価	目標	4人で水、すずり、すずり、すずりして作る。	3	4
	安全	体罰や危険な行為をせずに作業に取り組んだ。	2	4
		身だしなみを整えて作業に取り組んだ。	4	4
		まわりを守って作業に取り組んだ。	3	4
	時間	道具を安全に丁寧に扱った。	3	4
		作業開始や終了時刻を守って行動した。	4	4
	礼節	相手に伝わるように挨拶や声かけをした。	3	4
		まわりの声援を感謝することができた。	3	4
	作業量	正確に作業することができた。	3	4
		時間いっぱい作業することができた。	4	4
	自分から進んで作業に取り組んだ。	3	4	
振り返り	今日は水やすりなどの作業をして、時間いっぱい丁寧に取組むことができたので次回の作業も頑張りたいです。			
作業時の先生から	お声がけは、相手の顔を覗き込んで行うことが大切です。また、自分の作業が終わったら、周りの作業を待つことも大切です。自分の作業が終わったら、周りの作業を待つことも大切です。			
担任の先生から	体罰、罵詈雑言が無く、優しく丁寧な声かけができています。働くための土台となりますので、しっかりと覚えていきますよ。			



※1 デジタル作業日誌(例)

評価シート 月 日 ( )

製品 トートバッグ(小)

お客様の声 「飲み物、弁当などを入れて使いたい」

お客様の声	評価
ペットボトルがたてに入る高さ	
ペットボトルが倒れない仕切り	
弁当が入る広いマチ	

↓

改善が必要な部分

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

※2 話合いで使用した評価シート

#### IV 学部研究のまとめ

今年度、学部では二つの授業を検討した。単元計画においては、生徒一人一人の指導内容の詳細について、事前に担任や教科担当者と確認したり、学びの履歴シートを一層効果的に活用したりする必要があった。学部としては、年間を通して、生徒の「学び」を促すための手立てについて検討する機会を設定することができた。このことは、「参加」を促す手立ての確認と、「学び」を促す手立てを意識した授業の実践につながった。

各作業学習班の担当者からは、有効だった学びの手立てとして、実物の提示や外部講師による指導、気づきや思考を促す問い掛け、自分の課題に向き合う役割設定等が挙げられた。デジタル作業日誌の活用についても、効果的な指導方法の一つであることが確認できた。今後は、各手立てを「学び」を促す手立てとして確立できるよう、引き続き学部内での検討や検証を進めていきたい。

# 寄宿舎研究





**研究主題** 児童生徒の学びが「見える」生活指導 ―生活自立体験を通して―  
(2年次/2か年計画)

## 1 研究目的

一人一人の実態やニーズを的確に捉え、生活力を高めるための生活指導の在り方や効果的な指導方法を見いだす。

## 2 研究仮説

個々の児童生徒の実態やニーズから目標・手立てを設定し、児童生徒と目標を共有しながら成長や変容を適切に評価する。併せて、日々の生活における効果的な指導方法を共有しながら生活指導の改善を図る。

このことについて、個別の生活指導計画と生活自立体験\*の取組を関連付けて進めることで、児童生徒が将来の姿をイメージし自分から進んで活動する姿を引き出し、「何が身に付いたか」を実感しながら必要な力を効果的に身に付けることができるであろう。

※生活自立体験…将来の生活に関心や意欲をもち、必要な力を身に付けるための取組

## 3 昨年度の取組から

### (1) 成果

昨年度は、評価において、職員間や職員と抽出生との間で評価のずれがないよう話し合いを重ね、基準を揃えることを丁寧に行った。また、毎月の研究日や毎週はじめに行っている週ミーティングで抽出生の様子や変容を共有したことで、どの職員でも同じ指導ができるようになり、指導の改善を図ることができた。評価が分かりやすくなったことで、抽出生自身も、成長・変容が自分でも「見える」ようになり、できるようになったことを実感し意欲的に目標の達成を目指す姿が見られた。

### (2) 今年度の方向性

今年度は、生活面の実態把握をより丁寧に行うことができるよう、実態把握表の様式や実態把握の方法を見直すなどし、目標設定や評価に活用していく。また、職員間で情報共有を図り、有効な手立てを他の児童生徒へ生かせるようにしていきたい。昨年度の実績を基に、場面が変わっても学んだことを活用できるようにするための手立てを検討し、その有効性を検証しながら取組を進めていく。

## 4 研究内容・方法

### (1) 個別の生活指導計画と生活自立体験を関連付けた生活指導の仕組みの整備

- ・年間計画の立案と運用
- ・実態把握表の改善と活用
- ・実態把握とニーズの把握による目標設定・評価

### (2) 効果的な指導方法の検討と共有及び実践

- ・生活自立体験を活用した指導方法の工夫・改善
- ・児童生徒の参加と学びを促すための指導方法の共有と実践（能代スタンダード）

### (3) 習得した力を他の場面で生かすための手立ての検討と実践

- ・保護者等への情報発信と共有
- ・他の場面で生かすための環境設定

※上記（1）から（3）の内容について、日々の指導や研究日を通して実践・検証を行う。

## 5 年間計画

月	内容
4月	・昨年度の研究について ・今年度の研究テーマについて
5月	・今年度の研究手法・内容について ・学びが「見える」の捉えについて共有
6月	・4月からの取組の振り返り
7月	・研修会『「能代スタンダード」について』
8月	・研修会『家庭とのよりよい連携について』 ・家庭での取組につながる手立ての検討 ・「能代スタンダード」について（寄宿舎で取り組むことを検討・共有）
9月	・保護者との連携で有効だった手立ての共有 ・「能代スタンダード」について（子どもへの対応の仕方や姿勢の共有）
10月	・生活自立体験発表会の振り返り ・「能代スタンダード」を基にした振り返り
11月	・保護者との連携の振り返りと、家庭での取組につながる手立ての検証 ・事例紹介（タブレットを活用した保護者との連携） ・「能代スタンダード」を基にした振り返り
12月	・研究のまとめ①（グループごとに成果と課題を集約） ・「能代スタンダード」を基にした振り返り
1月	・研究のまとめ②（成果と課題を共有）
2月	・研究紀要（案）の提示 ・「能代スタンダード」を基にした振り返り

## 6 研究経過

### (1) 個別の生活指導計画と生活自立体験を関連付けた生活指導の仕組みの整備

- ・今年度取組を始めるに当たり、仕組みの整備と、個別の生活指導計画の様式等の改訂を行った。仕組みについては、個別の生活指導計画と生活自立体験の目標を統一し、その目標達成に向けて連動させながら進める年間計画を立案した。
- ・実態把握表についても見直した。従来の記述式から、項目ごとに細かいチェックができる表とし、現在何がどこまでできているのかが分かるようにした。併せて、同じ表を子ども自身の自己チェック表としても活用できるようにした。職員と子どもの評価基準が揃ったことで、子ども自身の自己評価と職員からの他者評価を行いながら、目標や振り返りを行うことができた。

《 年間計画（前期） 》

月	個別の生活指導計画	生活自立体験
4	実態把握 保護者面談	子どもとの話合い
5	前期目標 設定	
6		<ul style="list-style-type: none"> <li>・強調週間</li> <li>・達人・超人へ挑戦</li> <li>・自立体験室の活用</li> </ul>
7		前期の振り返り
8	実態把握 保護者面談	子どもとの話合い
9	前期評価・後期目標 設定	
	『個別の生活指導計画通信』の配付	

《 実態把握・引継ぎ表 》

項目	チェック内容	実 態			備考(担当職員)
		入居時による 通常の生活での必要	卒業に向けた 見守りの必要	おかしな一歩でできる （一人の成長を促す）	
食事	① 正しい食事を摂取する				
	② いただきます、ごちそうさまで感謝する				
	③ 好き嫌いせず食べる			野菜が苦手であれば、 同じ種類のものを	
	④ よく噛む				
	⑤ 食器を汚さない			器物を壊さず、お水だけで 洗うことができる	
	⑥ 飲み物を飲まず飲み残す			グループでの練習が 進んでいる 様子確認と指導している	
	⑦ 食器を片づける				
	⑧ 清潔に保てる				
	⑨ 手洗いの場を把握				

今できていること、どうすればできるかが分かり、卒業まで使える様式

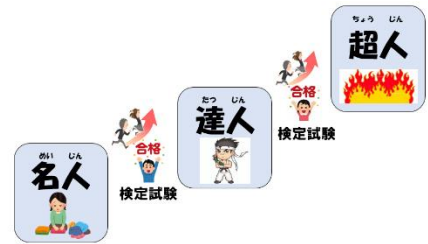
(2) 効果的な指導方法の検討と共有及び実践

- 生活自立体験は、全寄宿舎生を対象とし、それぞれが自分の目標を定めて取り組んだ。指導方法の工夫として、以下の①～⑥について実施した。

①ステップアップと称号

目標達成に向けてステップアップする制度を取り入れた。検定試験に合格すると、名人→達人→超人とステップアップし、称号が与えられる。この試験は、希望すれば誰でも挑戦することができ、検定の内容は、それぞれの子どもに合わせたものとしているため、自分のレベルに合わせてレベルアップすることが可能となっている。

《生活自立体験スリーステップ》



②強調週間の設定と自立体験室の活用

特に力を入れて取り組む期間として、強調週間を設定した。それぞれの子どもが前後期2週間ずつ行い、目標や振り返りの発表も行った。また、希望する生徒は自立体験室に一人で宿泊し、職員の言葉掛けを極力少なくした環境の中で、自分で考えて生活する体験をした。

③応援の木

これは、子どもたちの頑張りを励ますためのもので、応援メッセージを付箋紙に書いて伝えることができるようにした。職員だけでなく、子どもたち同士、学校職員からなど、誰でも自由にメッセージを伝えることができ、本人の励みになっている。

《応援の木》



④見える掲示

プレイルームに全員の目標を掲示し、ステップアップや強調週間など、個々の取組の状況が一目で分かるようにした。子どもたちの注目度も高く、意欲の喚起にもつながっている。

《取組や頑張りが見える掲示》

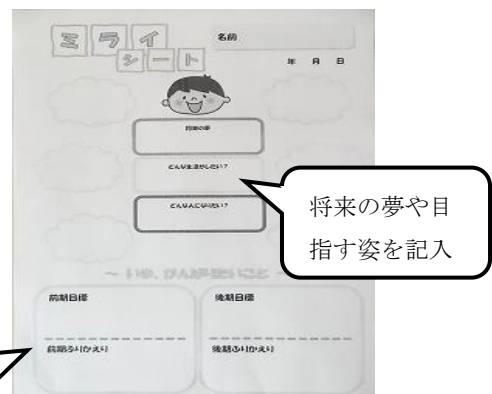


⑤ミライシート

子どもが目標設定をするためのツールとして「がんばることシート」を作成した。後期からは「ミライシート」として改訂し、目標設定だけでなく振り返りをする際にも活用し、複数年に渡って活用できるようにした。将来の自分の姿をイメージしながら、その姿になるために今何をしたらよいかを考えるきっかけとした。

《ミライシート》

将来に向けて頑張ることや取組の振り返りを記入



## ⑥生活自立体験発表会

自分自身の取組を他の友達に伝えたり、友達の取組を聞いたりする機会として、前期末と後期末に3～4名の小グループで話し合いを行った。前期は、口頭のみでの話し合いだったため内容がうまく伝わらず、話し合いが進みづらかった。これを受け、後期は写真や動画、文字で見える工夫をし、そのことにより話し合いが活発になった。

### 《生活自立体験発表会の様子》



事前に記入しておいた付箋紙を活用し、自分の頑張りを発表。更に、友達の発表を聞いて、良いところや真似したいところについても発表した。

話し合った内容を模造紙にまとめ、プレイルームに掲示している。

- ・昨年度有効だった手立てについては、各担当がそれぞれの子どもに合わせて取り入れながら指導を行った。チェック表を活用した指導では、具体的なチェックポイントを子どもと一緒に考え、自己評価と他者評価を取り入れる、目標達成シート（マンダラチャート）を使って実態把握をする等、毎週行っている週ミーティングで共通理解を図りながら実践した。
- ・「能代スタンダード」については、寄宿舎でも取り入れられる部分について実践している。『「能代スタンダード」研修会』を受け、寄宿舎全体としてできることや、指導で心掛けたいことなどについて話し合い、共有した。また、子どもに対応する際心掛けたいポイントをリストアップし、毎月、自己評価を行い、振り返る機会とした。

### (3) 習得した力を他の場面で生かすための手立ての検討と実践

- ・寄宿舎で習得した力を他の場面で生かすため、保護者との連携について教育専門監から研修を受けた。意識したいポイントや、どうすれば様子が伝わりやすく共有できるかなど、実際に保護者との関わりの中で感じていることを出し合い、それぞれの保護者に合った対応方法について助言をいただいた。

#### 寄宿舎の取組を保護者と共有するための効果的な方法として挙げられた一例

- ・寄宿舎と家庭での違いを考慮し、負担にならない伝え方をする。(必ずでなくて良い、できるところだけで良いなど)
- ・寄宿舎と同じようにやってほしい、ではなく、できるところから取り組んでもらえるよう、やり方を簡単にする、保護者が迷わないやり方を伝える、寄宿舎で使用しているツールを共有する。
- ・動画などで実際にやっている姿を見せる→家庭でどこまでできるか、事前に手立てをすり合わせる。
- ・子どもが、自分でやりたいという気持ちを大事にする→手立ては「やりたい」を達成できるようにフォローする。

- ・数名の生徒については、教育専門監からの助言を基に取組の様子をタブレットで撮影し、保護者に見ていただいた。これまでは取組の様子を書面や口頭で伝えていたが、動画で示したことで、より具体的に子どもの様子を知ってもらうことができた。その上で、ツール等家庭で取り組むための準備を整え、保護者とも相談しながら進めたことで家庭での取組につながった。




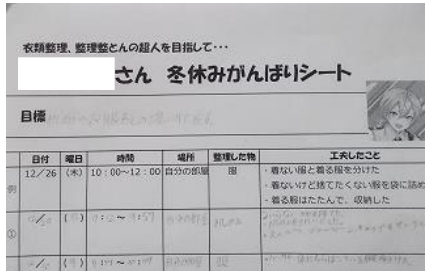
- ・今年度は、個別の生活指導計画等の様式も見直した。保護者へ提示する資料は、より取組の様子が伝わりやすいものになるよう、写真付きの「個別の生活指導計画通信」として配付した。保護者からは「写真付きで分かりやすい。」「家庭でも取組について話題にした。」などのよい反応があった。

### 《個別の生活指導計画通信》



個別の生活指導計画の評価を保護者に分かりやすく伝えるためのもの（年2回配付）

### 《事例紹介》

《事例1》取組を家庭と共有できた例	《事例2》家庭との取組につながった例
<p>教育専門監からの研修を受け、寄宿舎での取組を動画で撮影し、帰舎日に保護者に見ていただいた。保護者からは「想像以上です。ここまでできると思いませんでした。ここまで取り組んでいるとも思いませんでした。」との声が聞かれた。目の前で聞いていた本人も、実際に保護者の称賛の声を聞いたことで、その後、家庭で進んで手伝いをするにつなげた。</p>	<p>生活自立体験の「整理整頓の達人」に合格し、家庭でも整理整頓を頑張りたいと本人から話があったため、写真で紹介しながら保護者に寄宿舎での取組を伝えた。その後も、家庭や寄宿舎での取組について適宜保護者と共有したり、長期休業中に衣類等を整理する機会を設けたりしたことで、家庭でも進んで整理整頓をすることが増えてきた。</p>
	 <p>保護者から 家庭では積極的に片付けをするようになり 私物の置き場所など、自分で考えて整理整頓を頑張っていました。</p>

## 7 成果と今後の方向性

### (1) 成果

- ・生活指導の仕組みを見直し、個別の生活指導計画と生活自立体験を関連付けて進めたことで、目標や指導方法等の共通理解が進み、効果的な指導につながった。また、実態把握・引継ぎ表は、今できていることが分かる様式に改訂したことで、より適切に子どもの実態や評価ができるようになった。
- ・見える掲示の工夫や、目標達成に向けてステップアップする仕組み、応援の木などは、子どもたちの意欲や励みとなり、必要な力を身に付けるために効果的だった。チェック表での評価や生活自立体験発表会での話し合い等で、頑張りやできたことを評価してもらった機会が増えたことにより、身に付いたことを実感しながら次の目標に向かう姿も見られた。さらに、自分のことだけでなく友達の見聞にも興味を示し、励まし合う様子もあった。

- ・「ミライシート」の活用は、将来の自分自身の姿を考える機会となり、現在の目標が将来の生活につながることで捉えるための手掛かりとなった。目標が明確になり、自己理解も進んだ。
- ・「能代スタンダード」については、子どもと関わる時の基本姿勢として、いくつか項目を挙げ、定期的に確認したことで、自己を振り返る機会となった。
- ・家庭との連携では、写真を入れた「個別の生活指導計画通信」の配付や動画等の活用が、保護者との情報共有に有効であることが確認できた。取組の様子が伝わりやすくなったことで、家庭での取組につながるものが明らかになったため、今後もこれらのツールを効果的に活用していきたい。

## (2) 課題・今後の方向性

- ・生活自立体験の一連の流れについては、取組を進めていく中で、子どもたちも徐々に見通しをもつことができるようになってきている。次年度以降も継続していくに当たり、無理なく生活の中で実践されていくよう、内容を整理し計画的に進めたい。
- ・達人・超人検定や強調週間については、それ自体が目的にならないよう気を付けたい。これらが全ての子どもにおいて有効ではないことを理解し、あくまで指導ツールの一つであることを認識して、指導にあたることができるとうい。生活自立体験が成功体験を積むツールとして活用できるよう、確認しながら進めていく。
- ・「能代スタンダード」については、職員個々に手立ての実施を徹するまでには至らなかった。寄宿舎として活用するための資料をまとめ、全職員で共有しながら日々の指導で実践していきたい。
- ・習得したことを他の場面でもできるか、継続して取り組めるかについては、他の場面＝家庭だけではなく、学校や実習先、他の相手等も含めて幅広く見ていきたい。また、継続して取り組むためには、必要性が分かって取り組んでいるかが大切であると考えている。自分から「やろう」と思えるよう、「ミライシート」を活用した担当職員との話合いや子どもたち同士の話合いを充実させるなど、内発的動機付けにつながるような工夫をしていきたい。

# 各資料

---



【資料1】「観点別学習評価表（学びの履歴シート）」 ※小学部生活科第1段階より抜粋

観点・能力	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
観点等の	活動や体験の過程において、自分自身や身近な人々、社会及び自然の特徴に関心をもっているとともに、身の回りの生活において必要な基本的な習慣や技能を身に付けている。	自分自身や身の回りの生活のことや、身近な人々、社会及び自然と自分との関わりについて関心を持ち、感じたことを伝えようとしている。	自分のことに取り組もうとしたり、身近な人々、社会及び自然に関心を持ち、意欲をもって学ぼうとしたり、生活に生かそうとしたりしている。
基本的 生活習慣	食事前の手洗いや配膳、食後の片付けを含んで食事の初歩的な行動が分かり、行うことができる。	食事に関する初歩的な手順に気付き、教師と一緒に言い、できたことなどを表現している。	食事に関わる初歩的な学習活動を通して、自分のことに取り組もうとしている。
	用便の順番にしたがって用を足すことや、用便後に手を洗うことなどが分かり、教師の援助を受けて行える。	尿意や便意などを伝えたり、支援を求めたりすることができる。	用便に関わる初歩的な手順にしたがって用を足そうとしている。
	必要な支援を受けながら着替えをし、気持ちを落ち着けて一人で就寝することができる。	就寝に関する初歩的な処理に気付き、教師と一緒に言い、できたことなどを表現している。	就寝に関わる初歩的な学習活動を通して、自分のことに取り組もうとしている。
	洗面や歯磨きなど清潔に関する初歩的な知識や技能を身に付けている。	清潔に関する初歩的な処理に気付き、教師と一緒に言い、できたことなどを表現している。	清潔に関わる初歩的な学習活動を通して、自分のことに取り組もうとしている。
	持ち物の整理、自分の服や靴など自分の使った物の整理や、決められた場所に置くなど身の回りの整理に関する初歩的な知識や技能を身に付けている。	身の回りの整理に関する初歩的な処理に気付き、教師と一緒に言い、できたことなどを表現している。	身の回りの整理に関わる初歩的な学習活動を通して、自分のことに取り組もうとしている。
	簡単な衣服や靴の着脱の仕方などの初歩的な知識や技能を身に付けている。	衣服等の着脱に関する初歩的な処理に気付き、教師と一緒に言い、できたことなどを表現している。	衣服の着脱に関わる初歩的な学習活動を通して、自分のことに取り組もうとしている。
安全	危険な場所を知り、身の回りのある玩具等を口に入れない、階段や段差などに注意して歩くなど、自分の身を守る適切な行動に気付いている。	自分の身を守る適切な行動に気付き、教師と一緒に安全な生活に取り組み、できたことなどを表現している。	危険防止に関する初歩的な学習を通して、危ないことや危険な場所等を選ぼうとしている。
	信号や標識に従うことや安全な道路の渡り方など、交通安全の初歩的な知識や技能を身に付けている。	道路の安全な歩き方に気付き、教師と一緒に安全な生活に取り組み、できたことなどを表現している。	交通安全に関する初歩的な学習を通して、危ないことや危険な場所等を選ぼうとしている。
	避難訓練の初歩的な知識や技能に気付き、落ち着いて指示に従って避難することができる。	教師と一緒に避難訓練に取り組み、できたことなどを表現している。	避難訓練に関する初歩的な学習を通して、危ないことや危険な場所等を選ぼうとしている。
	教師と一緒に活動しながら危険な場所や事故につながる行動に気付いている。	身の回りの危険な場所や行動に気付き、教師と一緒に安全な生活に取り組み、できたことなどを表現している。	防災や事故に関する初歩的な学習を通して、危ないことや危険な場所等を選ぼうとしている。
予定・	簡単な日課に関心をもっている。	簡単な日課に気付き、教師と一緒に日課に沿って行動し、できたことなどを表現している。	日課に沿って行動しようとしている。
遊び	教師の働き掛けを受け入れて、まねをしたり、ごっこ遊びをしたり、遊具を使った遊びをしたりするなど、安定した気持ちで身体を動かして遊んでいる。	身の回りの遊びに気付き、教師や友達と同じ場所で遊び、遊んだことを表現している。	自分の好きな遊びを選び、教師や友達と同じ場所で遊ぼうとしている。
	遊具の準備から片付けまでの一連の活動に自分から取り組んだり、教師と一緒に取り組んだりしている。	簡単な遊具の準備や片付け方に気付き、教師と一緒に取り組み、感じたことを表現している。	簡単な遊具の準備や片付け方に関心を持ち、教師と一緒に取り組もうとしている。
人との 関わり	自分自身や家族のことが分かり、簡単な自己紹介をしたり、呼び掛けに答えたりすることができる。	教師や身の回りの人からの働き掛けに気付き、身振りや表情、挙手や発声、絵カード等で応答している。	簡単な自己挨拶や呼び掛けへ応答を積極的に行おうとしている。
	身近な教師に簡単な要求を表情、身振り、絵カードなどで表現したり、お辞儀や手を振るなどして挨拶したりすることができる。	簡単な要求を自分でできる手段を用いて伝えたり、挨拶などを通してコミュニケーションをとろうとしている。	積極的に要求したり、挨拶したりしようとしている。
	人の来訪や電話に気付き、関心をもっている。	人の来訪やかかってきた電話に気付き、身近な大人に伝えようとしている。	電話や来客の取次に関心を持ち、伝えようとしている。
役割	いろいろな行事に参加し、集団に慣れ、集団の中での役割に気付いている。	身の回りの集団に気付き、教師と一緒に役割を果たし、できたことなどを表現している。	集団の中での役割を果たそうとしている。
	地域の行事へ参加し、楽しみ、自分の役割を果たすことに気付いている。	地域の行事へ参加し、身近な大人と一緒に役割を果たし、できたことなどを表現している。	身近な大人と一緒に地域の行事の中での役割を果たそうとしている。
	簡単な作業を共同で行い、作業において分担された個人の役割を果たすことに気付いている。	共同で取り組む作業での分担された役割に、教師と一緒に取り組み、できたことなどを表現している。	教師と一緒に共同作業の中での役割を果たそうとしている。
手伝い・ 仕事	物の配達や伝言、作業の手伝いなどの喜びに気付いている。	身の回りの簡単な手伝いや仕事を教師と一緒に言い、感じたことなどを表現している。	身の回りの簡単な手伝いや仕事をやろうとしている。
	所持品の整理や友達や学級の物の整理、不必要な物の選別と廃棄の仕方などについて気付いている。	身の回りの整理整頓を教師と一緒に言い、できたことなどを表現している。	身の回りの整理整頓をやろうとしている。
	窓や扉の開閉を繰り返しながらその意味に気付くこと。	窓や扉の戸締まりを教師と一緒に言い、できたことなどを表現している。	身の回りの戸締まりをやろうとしている。
	ごみを拾って捨てたり、掃除用具を使って簡単な掃除をしたりすることに気付いている。	身の回りの簡単な掃除を教師と一緒に言い、できたことなどを表現している。	身の回りの簡単な掃除をやろうとしている。
	手伝いなどが終わったら、使用した道具や材料などの片付けを行い、教師に報告することなどに気付いている。	身の回りの簡単な後片付けを教師と一緒に言い、できたことなどを表現している。	身の回りの簡単な後片付けをやろうとしている。



【資料2】個別の指導計画 ※実際に作成したものを一部抜粋（中学部2年）

教科	段階	資質・能力	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
社会	第1段階	評価の観点等	身近な地域や市区町村の地理的環境、地域の安全を守るための諸活動、地域の産業と消費生活の様子及び身近な地域の様子の移り変わり並びに社会生活に必要なきまり、公共施設の役割及び外国の様子について、具体的な活動や体験を通して、自分との関わりが分かるとともに、調べまとめる技能が身に付いている。	社会的事象について、自分の生活や地域社会と関連付けて具体的に考えたことを自分の言葉で表現している。	身近な社会に自ら関わろうとする意欲をもち、地域社会の中で生活することの大切さについて自覚している。
社会	第1段階	社会参加ときまり	学級や学校の中で、自分の意見を述べたり相手の意見を聞いたりするなど、集団生活の中で役割を果たすための知識や技能が身に付いている。	○	○
社会	第1段階	公共施設と制度	身近な公共施設や公共物の役割が分かっている。	○	○
社会	第1段階	公共施設と制度	身近な生活に関する制度が分かっている。	○	○
社会	第1段階	地域の安全	地域の安全を守るため、関係機関が地域の人々と協力していることが分かっている。	○	○
社会	第1段階	産業と生産	生産の仕事は、地域の人々の生活と密接な関わりをもって行われていることが分かっている。	○	○
社会	第1段階	産業と生産	販売の仕事は、消費者のことを考え、工夫して行われていることが分かっている。	○	◎
社会	第1段階	我が国の地理や歴史	身近な地域や自分たちの市町村の様子が分かっている。	○	△
社会	第1段階	我が国の地理や歴史	身近な地域や自分たちの市町村の様子、人々の生活は、時間とともに移り変わってきたことを知っている。	○	△



指導の方法

分類	項目	参加と学びを促すための手立て ※特に効果的であった内容をチェック					
環境設定	配置や環境	机の位置や向き		並び順や並び方		人や物との距離感	
		安全で動きやすい動線・空間		用具類の置き方の工夫		板書の工夫	
		時刻や時間の提示		印やマークの使用			
		その他の工夫					
物的支援	教材・教具	単元計画表の工夫		本時の流れの提示		前時までの内容の掲示	
		見本の提示・活用		実物の提示・活用		ワークシート様式の工夫	
		写真・動画の活用		カードの活用		扱いやすい道具	
		その他の工夫					

環境設定	チームティーチング	支援方法・内容の共有		役割分担の工夫		教師数の調整	
		教師の立ち位置		個や場面に応じた支援量の調整			
		その他の工夫					
人的支援	教師の働き掛け(発問や評価)	1指示1動作		適切な説明内容と量		声量や話す速度の工夫	
		気付きを促す問い掛け		思考を促す問い掛け		思いを引き出す問い掛け	
		学びを確かめるための工夫		タイミングのよい確認		即時評価	
		称賛方法の工夫		自立活動の課題に応じた支援			
		その他の工夫					

活動内容や場面設定	グループ、役割の設定	グルーピングの工夫		得意やよさを生かした役割分担		全員での役割分担	
		リーダー役の設定		グループや役割の固定			
		その他の工夫					
	活動内容	適切な時間配分		適切な活動順		活動量の確保・調整	
		分かりやすい活動		一人のできる活動		試行錯誤できる活動	
		安全に取り組める活動		効率よく取り組める活動		協働的な活動	
		その他の工夫					
	場の設定	自力思考の時間確保		繰り返しの場面の設定		体験する場面の設定	
		意見交換の場面の設定		グループ同士の学び合い		学習成果を見合う場面の設定	
		その他の工夫					
	※導入場面で	見通しや意欲につながるしかけの工夫		前時を振り返る場面の工夫		写真や演示を取り入れた説明	
		子どもが活動する場面の設定		めあての確認・共有方法の工夫			
		その他の工夫					
	※まとめや振り返り場面で	子どもが活動する場面の設定		互いの考えを共有する場面の設定		発言や考えを残して生かす	
		最後まで集中できる内容・展開		記録や日誌の工夫			
その他の工夫							

ICT機器の活用	電子黒板の使用		タブレット端末の使用		意思表出ツールとしての活用	
	スライドや作品づくりでの活用		話し合いでの活用		振り返りやまとめでの活用	
	発表での活用		その他の活用			

【資料4】令和6年度 学習指導案（正案）様式

<書式について>

- ・余白は上下左右 20mm、文字数は 45 字を基本とする。※表についてはこの限りではない。
- ・フォントについて、本文はMS明朝 10.5p（数字含）とする。各見出しはMSゴシック 10.5p とし、タイトルのみ 12p とする。
- ・(1)・(ア)・2桁以上の数字は、全て半角で作成する。
- ・箇所に応じて必要なスペースを空ける（□：全角スペース    -：半角スペース）。

<確認>

- ・各内容を関連付けながら読むことができるように、**A3サイズ見開き（両面）**を基本とする。

A3（表面）

○学部○年 指導の形態名 学習指導案 （記入例）

様式内の「児／生」について  
→小「児童」 中・高「生徒」  
に各自で修正

日時 令和 年 月 日 ( ) 00 : 00 ~ 00 : 00  
場所 ○○○○ → 児／生数 名  
授業者 ○○○○ (T1) ○○○○ (T2)

1 □ 単元（題材）名

2 単元の概要

2 単元の概要：  
これまでの学習履歴や中心となる学習活動の**要旨**を記載する。（3行程度まで）

3 単元の計画

□（1）単元の目標（本単元で扱う主たる各教科の内容のまとまり）

教科・段階	知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
職・家1 (名)	簡単な調理を通して、調理の基礎的な知識と技能を身に付ける。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">                     3（1）目標： 単元において中心的に扱う各教科等から順に記載する。 観点別学習評価表（評価規準）の内容を「<b>目標</b>」としての<b>表現</b>にして記載する。                 </div>	
職・家2 (名)	調理に必要な材料の分量や手順などが分かり適切に調理する。		
社会1			

□（2）個別の手立て（配慮事項・支援内容）

児／生名	段階	配慮事項・支援内容
○・○	1	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">                     3（2）個別の手立て：                      パターン① <b>個別の教育支援計画</b>や<b>個別の指導計画（自立活動）</b>から必要な事柄を<b>転記</b>                      パターン② 単元の目標を達成するために必要な支援や手立てを記載                 </div>		

□ (3) 指導計画 (総時数○時間)

小单元名・学習活動		時数	小单元で扱う各教科等と指導内容
第一次	「○○をつくろう」		
	□①役割分担	(2)	職・家1 (調理の基礎) 職・家2 (手順の理解) 社1 (役割)
	②調理実習 I	(6)	職・家1 (簡単な調理) 職・家2 (手順を理解して調理する)
	③作り方の紹介	(4)	社1 (自分の意見を述べる)
第二次	「食べてもらおう」		
	①調理実習 II	(4) 本時 1~4/6	職・家1 (簡単な調理) 職・家2 (分量を理解して調理する)
	②感想の聞き取り	(2)	社1 (相手の意見を聞く)
第三次	「 」		

3 (3) 小单元で扱う各教科等と指導内容：  
小单元において**単元目標のどの部分を指導・評価するか**を記載する。

A 3 (裏面)

(4) 単元の評価規準

教科・段階	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
職・家1 (名)	簡単な調理を通して、調理の基礎的な知識と技能を身に付けている。		
職・家2 (名)	調理に必要な材料の分量や手順などが分かり適切にできる。		

3 (4) 評価規準：観点別学習評価表から内容を**抜粋する**。

4 本時の計画 (指導計画 第○次 ○時間中の○時)

(1) 本時の目標

教科名 ○段階	<p>★4 (1) 本時の目標： 3 (3) 指導計画の第○次○時間中の○時の指導内容と、<u>各教科の見方・考え方を踏まえ</u>、<u>本時で何を身に付けるのか具体的に</u>記載する。</p>
教科名 ○段階	

(2) 学習過程

時間 (分)	学習活動	指導上の留意点	
		全体	個別
	1 □ 前時までの振り返りをする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1 回目の調理実習の要点を全員で確認できるように・・・を提示する。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">           めあて            ○○・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。         </div>	
<p>★4 (2) 学習過程：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 本時のめあてを達成するための手立てや指導の工夫を記載する。              →視点 能代スタンダード（参加と学びを促すための3つの柱）              各教科の見方・考え方              主体的・対話的で深い学び</li> <li>・ 「個別」欄 めあての達成や参加と学びを促すために、本時の学習活動全体を通して（実態によっては学習活動の場面において）どのような手立てを講じるか記載する。各生徒一人一人について記載する。</li> <li>・ 表の幅は各自で調整する。</li> </ul>			

★本時の評価規準について：評価規準は目標と一体であることから、様式への記載は省略するが、評価規準の設定と評価は必ず行う

★配置図・板書・ワークシート様式は、余白スペースを活用して作成または別添資料とする。（参観において必要な場合は添付する）。

【資料5】秋田県立能代支援学校「能代スタンダード」



【資料6】標準年間指導計画（試案）

中学部1年 社会科 標準年間指導計画		
[1段階]		
指導内容	指導の形態/単元名等	時数
社会参加ときまり		
・学級や学校の中で、自分の意見を述べたり相手の意見を聞いたりするなど、集団生活の中での役割を果たすための知識や技能を身に付けること。	「集団参加と役割」	
・集団生活の中で何が必要かに気づき、自分の役割を考え、表現すること。		
・家庭や学校でのきまりを知り、生活の中でそれを守ることの大切さが分かること。	「社会生活ときまり」	
・社会生活ときまりとの関連を考え、表現すること。		
公共施設と制度		
・身近な公共施設や公共物の役割が分かること。	「身近な公共施設」	
・公共施設や公共物について調べ、それらの役割を考え、表現すること。		
・身近な生活に関する制度が分かること。	「身近な生活に関する制度」	
・身近な生活に関する制度について調べ、自分との関わりを考え、表現すること。		
地域の安全		
・地域の安全を守るため、関係機関が地域の人々と協力していることが分かること。	「地域の安全」	
・地域における災害や事故に対する施設・設備などの配置、緊急時への備えや対応などに着目して、関係機関や地域の人々の諸活動を捉え、そこに関わる人々の働きを考え、表現すること。		
産業と生活		
※中学部2年で取り扱う		
我が国の地理や歴史		
※中学部2年で取り扱う		
外国の様子		
※中学部2年で取り扱う		



# 公開研究会 〈記録〉

---



# 令和6年度 秋田県立能代支援学校 公開研究会 開催要項

秋田県立能代支援学校

## 1 開催主旨

本校では、児童生徒一人一人の学習状況を的確に捉え、資質・能力を育むための授業づくりの在り方を見いだすことを目的とし、各教科等を合わせた指導を対象とした研究に取り組んでいます。自校で作成した「観点別学習評価表（学びの履歴シート）」を各教育計画と関連付けることで、資質・能力を明確にした授業実践と、指導と評価の一体化を図るための平易な仕組みづくりを目指しています。

今年度は、研究のまとめとして、自主公開研究会を開催することとしました。多くの皆様から御指導や御助言をいただき、本校の教育や研究の充実につなげたいと考えています。

- 2 研究主題 児童生徒の学びが「見える」授業づくり  
 —指導と評価の一体化による確かな成長を目指して— （2年次／2か年計画）

- 3 日 時 令和6年12月12日（木）午前9時50分から午後4時まで

- 4 会 場 秋田県立能代支援学校  
 〒016-0005 秋田県能代市真壁地字トトメキ沢135番地  
 TEL 0185-55-0691 FAX 0185-55-0681 <https://noshiroshien.ed.jp>

- 5 開催方法 参集及びオンデマンド配信での開催

- 6 対 象 全国の特別支援教育に携わる教員  
 ・全国の特別支援学校  
 ・秋田県内特別支援学校、能代・山本地区の小学校・中学校・高等学校

## 7 講演講師及び助言者

講演講師 文部科学省 初等中等教育局 特別支援教育課  
 特別支援教育調査官 加藤 宏昭 氏

助言者 独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所  
 研究事業部 総括研究員 武富 博文 氏

## 8 日程等

9:30 ～9:45	9:50 ～10:05	10:05 ～10:20	10:30 ～11:20	11:30 ～12:30	12:30 ～13:30	13:40 ～14:10	14:20 ～15:40	15:45 ～16:00
受付	開会 行事	研究 報告	授業公開 ・生活単元学習 (小・中学部) ・作業学習 (高等部)	研究 協議会	昼食	指導助言	全体講評・講演	閉会 行事

参加者 来校による参加：31名 オンデマンド配信の視聴による参加：104名

---

### 講評・講演

---

演 題 「児童・生徒の資質・能力を育むための知的障害教育の考え方  
～ 指導と評価の一体化を踏まえて～」

講 師 文部科学省 初等中等教育局 特別支援教育課  
特別支援教育調査官 加藤 宏 昭 氏



---

### 指導助言

---

助言者 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所  
研究事業部 総括研究員 武 富 博文 氏



---

### 授業公開

---

生活単元学習 小学部1・2年 「きせつとあそぼう ～ふゆ～」  
授業者：大田若奈、大高聡美

生活単元学習 中学部2年 「中2お米食堂 ～学校米をPRしよう～」  
授業者：小林 生、山谷美樹、安田幸道

作業学習 高等部 縫製班 「新製品の開発 ～次年度に向けて～」  
授業者：菅 奈穂、笠井久子、鈴木亜希

---

### 研究協議会

---

協議テーマ 「指導と評価の一体化を図るための授業づくりの要点」

### □児童生徒の実態把握について

- ・何のために児童生徒の実態を把握するのか。各教科の部分では、児童生徒一人一人の各教科の習得状況や既習事項を確認するための実態把握が必要。どこまで学んだのか、そしてどこまで資質・能力が身に付いているのかという部分をきちんと把握していく必要がある。さらに卒業するまでに各教科等の指導を通してどんな資質・能力が必要になったのかという指導動機を明確にしていくことが大切。一方、自立活動はオーダーメイド。障害の状態からくる困難さを改善克服していくために一人一人に応じて考える実態把握が必要。各教科等と自立活動では、実態の把握の仕方が違う。各教科等を進めていく場合には、当該教科の学習内容の習得状況や到達状況をきちんと把握して、指導する内容を設定していく必要がある。能代支援学校の研究資料にも同じようなことが書かれている。

### □教育課程の編成について

- ・知的障害教育の場合、個に応じた指導を重視するあまり、児童生徒の実態から、個別の指導計画から年間の指導計画が決定されるという流れが出来上がってしまっている場合が時々ある。学習指導要領上の内容の一部に偏った指導がされているといったことが生じてしまう。さらに、学習指導要領上の内容を確認せずに、先生方がこの子にはこれが必要だから、ということで指導してしまうことは、公立学校としては非常に偏った指導をしてしまうことになるため、こういうことが起きないようにきちんと、学校の教育目標があり、教育課程があり、授業がどこに位置付いているかを把握して授業を行う必要がある。

### □学習する内容と学習活動について

- ・基本的に、学習指導要領に示されている各教科等の内容は、勝手に学校や先生方の裁量で落としていってしまうことは許されない。「きちんと取り扱って下さい」と言われている。取り扱わないことは、その子どもはその内容を学ばないことになる。学ばないということは、その後の学習に支障が出る可能性があるということ。安易に、先生方が独自の判断でこの子にはこの内容はいらないだろうと取り扱わないことがあると、学ぶ機会を失ってしまうことになる。安易に知能指数、IQのような指標のみをもって「この子にはこの内容は難しい」や、知的な障害が重いということのみをもって「この内容はやらない」ということをしないよう、十分に学校で吟味をして指導計画を立てていただきたい。

### □指導内容の設定について

- ・学校では各教科の段階で示す内容を基にして具体的に指導内容を設定する。この「内容」と「指導内容」については、言葉の違いがある。小学部であれば6年間、中学部であれば3年間、高等部であれば3年間を見通して計画的に指導する必要がある。能代支援の研究では、学習指導要領で示されている内容に対して、いつ、何を、どのように指導していくのか、これを学校としてしっかり計画を立てることが重要である、と示されている。取り扱わないといった場合も根拠をもち、学校として「この内容は児童生徒にとっては段階として難しいため取り扱わない」という判断を計画的にしていることが重要である。
- ・指導内容と学習活動をきちんと整理し区別しないと、観点別学習状況の評価は行えない。教科別の指導の場合は分かりやすいが、各教科等を合わせた指導になると、途端に分かりにくくなる状況が、これまではあったのではないかと。各教科等を合わせた指導でも教科別の指導でも、学習指導要領が示す内容をきちんと整理することが大事である。学習活動もちろん大事だが、やはりその活動の中で何を学んでいるのか、学習する内容が明らかになっていることが必要であるということをも十分に理解いただきたい。

## □単元目標について

- ・各教科等を合わせた指導は、指導の形態である。生活単元学習、作業学習、遊びの指導などは目標や内容を有しているものではない。各教科等を合わせた指導の目標を設定してもいいですかという質問が度々ある。各教科等を合わせた指導の目標設定をしても構わないが、必ずそれに合わせて取り扱っている各教科等の目標、内容を設定する必要がある。単元目標と言う場合、学習指導要領における各教科等の目標と、活動上の目標を区別すること。各学校で明確にしておくこと。活動目標では評価ができないことを理解いただきたい。各教科等の目標が必ず必要である。

## □指導の形態、各教科等を合わせた指導を行う際の留意点について

- ・各教科、道徳科、外国語活動、特別活動及び自立活動の内容を基に設定する。各教科等を合わせた指導を行う場合にも、授業時数を定めること。知的障害教育では各教科等を合わせた指導がありきではない。今までは単元ありき、活動ありきで各教科等を合わせた指導が進められたこともあるが、各教科等の内容を取り扱っていく際に、教科別で指導する方が効果的である、あるいは、各教科等を合わせた指導が効果的であるといった部分をきちんと判断をして設定をしていただきたい。
- ・「現在行われている活動から、何の教科を指導しているか」という考えでは、評価の内容を系統的、計画的に指導できないという状態が生じる。各教科の年間指導計画を作成する段階で、例えば国語の内容を児童生徒に効果的に指導するためには、指導の形態はどちらがよいだろうかと考え、学校で判断し、指導の形態を選択していく。この考え方を基本としておかないと、計画的な指導ができないという状況が起こってしまうことがあることを理解いただきたい。
- ・一方、学校の特色を踏まえて各学校でこれまで培ってきた単元も大事である。学校として作っていた単元も、どのような内容を指導しているのかを改めて考えると、各教科等を合わせた指導ではないほうが実は指導しやすかったという話も聞く。逆も聞く。これまでありきで続けていくのではなく、学校で培ってきた単元についても見直しを図り、バランスを取りながら進めていくことが非常に重要である。

## □目標設定と学習評価について

- ・学習を評価するためには、学習の目標の設定がきちんとなされていないと当然評価できない。学習指導要領には、内容のまとまりごとに育成を目指す資質・能力が示されている。内容はそのまま学習指導の目標となりうる。つまり可能ということ。なお、「指導計画の作成と内容の取扱い」にも、「単元（題材）などの内容や時間のまとまり」と同じような「内容のまとまり」の文言があるが、それと、この内容のまとまりは違うものであることに注意する。
- ・各教科の学習評価は、学習指導要領に定める目標に準拠した評価として実施する。各段階の趣旨を踏まえる。各学校の裁量で考えたことを基に評価規準を作成していくこともあり得る。考え方を踏まえた上で、各学校で評価規準を作成していただきたい。評価規準作成のポイントは、各段階の評価の観点およびその趣旨を踏まえる。同じ段階の同じ内容で学んでいる場合、評価規準は全く同じであり、評価規準は一人一人の児童生徒に応じて作成するものではないことを十分注意する。

- ・各教科等の目標や内容は、学習指導要領に示されている目標・内容であり、先生方が改めて考えていただくものではない。一方で、これを踏まえて実際に指導していく場合、当然、子どもは一人一人違うため、そこから具体的な指導内容の設定が必要になる。目標を達成するために、授業をする先生方が設定していくものになる。これが子どもたち一人一人の個に応じた目標や評価になる。個別の指導計画がここで設定される。「子どもに何を教えたいのか分からない」という状況があることを耳にもする。特別支援学級の中では特にそうかとも思うが、指導する内容は決まっている。どこまで学んできたかが分かっているならば、次に何を指導するのは各教科できちんと示されており、悩む必要はない。ただ、どういうふうに指導していくのかは考えていただき、専門性を発揮していただきたい。
- ・各教科等を合わせた指導の評価について考えていただきたい。知的障害教育の場合には、単元をどう組んでいくのが非常に重要である。各教科の年間指導計画において取り扱っている単元や内容がどのように位置付いているのか、計画段階で把握していくことが非常に重要。各教科等を合わせた指導の場合には、色々な教科の内容や目標が入るが、子どもの目線からすると、5個も6個も目標があった場合に本当にその単元の中で学んでいけるのかを考えていく必要がある。
- ・何で評価をするのか。児童生徒が学習してきたことの成果を的確に捉えていく、あるいは前の学びからどのように成長しているのかを捉えていくために評価をしていく。この部分がきちんと見取れるように評価規準を作成して評価を徹底することが必要である。
- ・学習評価については、日々の授業の中での児童生徒の学習状況をまとめて把握し、そして指導の改善に生かすことに重点を置くことが重要で、評価をして終わりではない。今日の研究協議会の協議題も「指導と評価の一体化」だが、評価をすることはそれを次の指導に生かしていくこと。研究ではツール等を使うが実際の先生方が日々の中で使えるかという、なかなか使えない。能代支援でも、どこでどの評価をしていくのか、計画を立てていくことが非常に重要となる。カリキュラムマネジメントの話にもつながる。指導時数、指導の形態などの部分を盛り込みながら、各教科の年間指導計画を作成し、評価・改善をする。作ったら終わりではなく、評価・改善をしていきながら、それぞれの特別支援学校版の各教科等の指導計画を作る必要がある。非常に難しく、第一歩を踏み出すのは非常に大変だと思うが、第一歩を踏み出していただかないと始まらない。12年間を通して「うちの学校ではこのような学びを進めていきます」というものを、まずは作っていただく必要がある。これは管理職を中心に学校全体で取り組んでいくことが必要である。学校で作られた全体的な指導計画に基づいて、学年、習熟度学習グループでの各教科等の指導計画を作成して評価をしていく。自分たちの授業、学年の指導計画は、学校全体の指導計画のここに当たるのだということを明瞭に説明できるようにする必要がある。
- ・年間指導計画や単元計画といったものがあつた場合、そこから一人一人に応じた指導を進めていくに当たっては、個別の指導計画が大事になる。どういった手立てを使うかは個別の指導計画を通して明らかにしていくことがいい。一人一人の指導の評価や改善の部分は、「単元を組んだが、難しかったからこういうふうに変えたほうがいい」あるいは、「単元配列を年間指導計画で今このように配列しているが、ここは入れ替えたほうがいい」等、違った部分を変えていくことが、学校全体の教育課程の評価・改善につながる。

### □仕組み、カリキュラムマネジメントについて

- ・校長先生をはじめ、先生方が一体となって自校のカリキュラムマネジメントのシステム作りをしている。  
「学校を開く、実践を拓く、子どもの可能性をひらく」という学校教育の理念があり、どのように仕組みづくりを行っていけば、学校教育目標が達成できるのかを考えた。観点別学習評価表を学びの履歴シートとして使いながら、子どもたちの確かな履修状況または習得状況を確認しながら年間指導計画を作り、単元計画を更新し、というシステムを作った。どの学校もなかなかできない。価値のある実践である。個別の指導計画から教育課程の改善までがつながる道筋を作ることは難しい。
- ・カリキュラムマネジメントは各教科等の教育内容を相互関係で捉える。年間指導計画で全体的に捉えながら、単元と単元の関連性や教科と教科の関連性を考える。各教科等を合わせた指導が能代支援では中心となっているが、各教科等を合わせた指導の中での単元間の関連性などの計画をきちんと検討している。
- ・教育内容と教育活動に必要な人的物的資源、地域の外部の資源を活用しながら効果的に組み合わせることが大切。例えば、中学部の実践の中では、J Aとも連携している。外部の方と人的物的の資源を組み合わせながら実践している。本当にカリキュラムマネジメントの視点をもった教育課程の編成に当たっている。
- ・学習指導要領の中では、児童生徒の障害の特性と心身の発達の段階等並びに学習の進度等を考慮して基礎的・基本的な事項に重点を置くこと等が総則の中に位置付けられているが、学習進度の把握があまりなされていないと実感している。能代支援では学びの履歴シートを活用しながら蓄積していくと学びの履歴になっていく。引き継ぎされていく情報がきちんと整理されていると、次の学部でも、次の担任の先生でもうまく授業を組み立てていける、単元を組み立てていける。そんなことができるような仕組みをつくっている。
- ・各教科で作成する個別の指導計画は、児童生徒の一人一人の各教科の習得状況や既習事項を確認するための実態把握が必要である。なかなかできない部分を上手に行っているのがこの学びの履歴シートだと感じた。
- ・個別の指導計画は自立活動についても作成しているとのこと。この部分が大切である。特別支援学級等は特にマストで自立活動を扱うことになっているが、ノウハウをもっていないこともある。実践を積み重ねながら、学びの履歴シートやカリキュラムマネジメントシステムを、地域の小・中学校へ助言するということができればよい。

### □授業づくりについて

- ・資質・能力が3つの柱で再整理されていることへの理解が大切である。きちんと柱の関係性を理解することが重要である。ばらばらに設定されているのではなく、相互に関係し合いながら位置付けていくものとなっている。
- ・授業づくり、単元づくりの中で、習得、活用、探求という学びのプロセスをうまく作っていく。作っていくためのキーとなるポイントが、子どもたちが解決していく「問い」や「課題」の設定である。単元において問いをきちんと立てていく、その解決に必要な知識や技能がありそれらを働かせて考える、判断する、表現するということを見通しながら、教科等で示されている学びに向かう力や人間性を育てる。

- ・「人間性」は大切。教科だけではない。例えば、道徳教育の観点が合わせた指導の中でどのように位置付けられているか。道徳は4つの柱で設定されている。この部分を踏まえながら単元を設定する。そして、育成を目指す資質・能力を習得し、活用していく場面を作り上げていくことが大切。
- ・「習得・活用・探求」がキーワードである。その中で働かせるのが、各教科等の特質に応じた見方・考え方である。この部分を顕在化させてみる。学習指導要領解説に、その要点が押さえられている。どのような見方・考え方を子どもたちに働かせてもらいたいのか、漠然と思いつくだけではなく顕在化させていく。単元計画の中に位置付けていく。
- ・教科横断的な視点については、目標・内容の関連性だけでなく見方・考え方の関連性もある。国語で培った言葉による見方・考え方を、数学科の中で働かせる、社会科の中で働かせる、作業学習の中で働かせるなどは、実は行っている。見方・考え方は、各教科等を学ぶ本質的な意義の中核と言われている。この部分をしっかりと顕在化させると「問い」が鮮明になっていく。働かせる見方・考え方も鮮明になっていく。授業づくりのプロセスがうまく流れていくようになっていく。
- ・「習得・活用・探求」とは何かは、文部科学省のホームページに記載されている。基礎的、基本的な知識・技能及び思考力・判断力・表現力等は子どもに身に付けさせるもので、「習得・活用・探求」は、そのための学習活動の類型となると説明されている。
- ・「問い」のマネジメントが重要である。学習活動は、相互に関連し合っている。分類されるものではない。ここからここまでが習得、ここからここまでが活用、ここからここまでが探求、などという形ではない。当然一体となっていく部分がある。「習得・活用・探求」は、一方向に進むものではない。習得した次は活用、活用した後に探求など、必ず一方向に進むようなものではない。もちろん、一方向に進むこともあるが、いきなり町に出て実習するといった、活用から始めるようなことではない。学習のプロセスをしっかりと作っていくことが重要。
- ・「問い」は子どもと一緒に共有していくことが大切。あるいは、子どもたちの問いを授業の中で作り上げていくということが大切。重度の子どもたちは、うまく言葉にして語ることはできないが、表情や手振りなどで伝えてくれるものはたくさんある。汲み取りながら授業の文脈に織り込んでおく。その問いの解決を図っていく中で、知識や能力を習得し、習得した知識や能力を活用しながら子どもたちが考えたり、話したり、表現したりすることを通して、最終的に、学びに向かう力や人間性等に一体的に向かう。

#### □各教科等の見方・考え方について

- ・「習得・活用・探求」の学びの過程の中で、環境等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら知識を相互に関連付けて理解する。情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に想像したりすることなどによる、深い学びが実現できているか。深い学びと見方・考え方は、切り離せない関係にある。ここを顕在化させていくということも、今後の能代支援の授業づくりの更なる発展として期待している。
- ・見方・考え方については、物事を捉える視点や考え方と言われている。見方・考え方を支えているのは、資質・能力の三つの柱であり、この三つの柱と見方・考え方も相互の関係だと言われている。各教科の学習の中でこれらを働かせるだけではなく、大人になっても、生活していくに当たっても、重要な働きをするものと言われている。見方・考え方を実際の生活の中で働かせられるようにしていく。そういう組み立てに単元を構成していくことが重要である。



- ・知的障害のある子どもたちは、見方考え方を働かせる部分が難しいという状況もあるため、自立活動の視点を入れていくことが必要である。

#### □教育課程について

- ・能代支援学校の単元計画は教科等の内容は整理されている。道徳の内容、自立活動の内容がどう関連付いているのかという視点がさらに出てくるか。子どもたちの全人的な発達を促すことが、我々の教育課程作りで非常に大切な部分である。教科を取り扱うことは重要だが、道徳や自立活動、特活も重要であるため全体のバランスを見ながら考えることが大切である。
- ・資質・能力が育まれるプロセス、「習得・活用・探求」を構成していくことが重要である。確かに見取る評価計画等も念頭に置くことが重要である。年間指導計画の大きなまとまりと、個別の指導計画というミニマムなまとまり、この関係性を交換させていきながら教育課程を作っていくことが大切である。

# 各学部 学習指導案・年間指導計画

---



# 学習指導案・年間指導計画

(公開研究会 公開授業より)

・小学部

・中学部

・高等部

小学部1・2年 生活単元学習 学習指導案

日時 令和6年12月12日(木) 10:30~11:15  
 場所 小学部プレイルーム、中庭 児童数4名  
 授業者 大田若奈(T1) 大高聡美(T2)

1 単元名 きせつとあそぼう ～ふゆ～

2 単元の概要

児童は自然の中での活動を好み、興味をもっていることから、「きせつとあそぼう」をテーマに、年間を通して、季節の遊びや制作に取り組んできた。本単元では、冬の植物、虫を探したり、冬の食べ物や行事、遊びについて調べたりする。冬の遊び「凧あげ」では、様々な凧を作って遊び、冬の気候の特徴や風の力によって物が動くことについて学ぶ。また、折り紙やセロテープなどの身近な材料や用具を使って凧を作り、制作の楽しさを味わいながら用具の使い方や表現の仕方を学ぶ。

3 単元の計画

(1) 単元の目標 (本単元で扱う主たる各教科の内容のまとめ)

教科・段階		知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
生活1 (2名)	生命・自然	身近な自然の中で遊びながら自然の事物や事象に触れ、生き物などに興味・関心をもつ。	身の回りにある自然の事物や事象に気付き、教師と一緒に他者に伝える。	身近な公園や川、野山、海などの自然に触れ、知ろうとする。
生活2 (2名)		晴れや雨などの天候の変化や四季のおおまかな特徴などに気付く。	天候の変化や四季の特徴に気付き、教師と一緒に他者に伝える。	天気や空の様子に触れ、知ろうとする。
生活2 (2名)		植物や身近な動物に興味や関心を持ち、実際に栽培や飼育を行い、その成長や変化に気付く。	植物や動物の成長や変化などを記録し、気付いたことを他者に伝える。	植物や動物の世話をしながら、成長や変化を知ろうとする。
生活1 (4名)	ものの仕組みと働き	天候の変化や、太陽、月、星などと昼夜の関わりや、気温の違いなどの季節のおおまかな特徴を知る。	天候の変化や四季の特徴を調べ、気付いたことを教師と一緒に他者に伝える。	天候の変化や四季の特徴などに関心を持ち、知ろうとする。
生活1 (4名)		風やゴムの力によって物が動く様子に関心をもつ。	風やゴムの力によって物が動くことに気付き、教師と一緒に他者に伝える。	風やゴムの力で物が動くことについて知ろうとする。
図工1 (2名)	表現	かく遊びやつくる遊びを通して、身の回りの自然物などに触れながらかく、切る、ぬる、はるなどすることができる。	材料などから、表したいことを思い付き、線や絵をかくなどして表現しようとする。	かく、切る、ぬる、はるなどの活動に自ら取り組む。
図工2 (2名)		絵画や造形遊びを通して、身近な材料や用具を使い、かいたり、形をつくったりできる。	材料や、感じたこと、想像したこと、見たことから、表したいことを思い付き、表現する。	身近な材料や用具に関心を持ち、自らかいたり、形をつくったりする喜びを感じる。

(2) 個別の手立て (配慮事項・支援内容)

児童名	段階	配慮事項・支援内容
A (1年)	1	・冬の特徴「寒い」「風が強い」ことに気付き、風の強さに関心をもつことができるように、気温や風をカードで示す。また、外に吹き流しを設置する。 ・表したいことをイメージして自分から表現できるように、実際に見た植物や虫、食べ物などを選択肢として示す。
B (1年)	1	・風で物が動くことに気付くように、操作しやすい凧を準備する。風に気付く行動が見られた際には「風で動いたね」などと言葉掛けをし、気付きを促す。 ・色や形に気付いて表現しようとするができるように、色や形の変化が分かりやすい材料や活動を設定する。

C (2年)	1、2	・冬の特徴「寒い」「風が強い」や、風と物の動きの関係に気付くことができるように、風の強さを視覚的に示したり、「凧があがったのはどうしてかな」などと問い掛けたりする。 ・凧を作ることができるように、見本を準備する。また、描きたいものの特徴を意識できるように、色や形を問い掛けたり、見本を提示したりする。
D (2年)	1、2	・冬の特徴「寒い」「風が強い」や、風と物の動きの関係に気付くことができるように、気温や風の強さを視覚的に示したり、「凧があがったのはどうしてかな」などと問い掛けたりする。 ・凧を作ることができるように、見本を準備する。また、描きたいもののイメージを膨らませられるように、選択肢を示す。

(3) 指導計画 (総時数 42 時間)

小単元名・学習活動		時数	小単元で扱う各教科等と指導内容
第一次	「ふゆをさがそう」 ・冬の植物、虫探し	6 (2)	生活1 (生命・自然) ・自然の事物や事象に触れる ・身近に生息する小動物や草花 ・四季の特徴や天候の移り変わりに気付く 生活2 (生命・自然) ・自然が姿を変えることが分かる ・動物の動きに興味をもつ ・生き物への関心をもつ ・天候の変化に関心をもつ ・冬は寒いなどの季節の特徴に関心をもつ
	・冬の食べ物や行事調べ、体験	(2)	
	・冬の遊び調べ、体験	(2)	
第二次	「ふゆとあそぼう」 ・紙を使った凧づくり ・凧あげ	12 (6)	生活1 (生命・自然) ・天気や空の様子 ・四季の特徴や天候の移り変わりに気付く ・地域の行事と季節の関係について知る ・天候の変化に気付く 生活2 (生命・自然) ・天候の変化に関心をもつ ・冬は寒いなどの季節の特徴に関心をもつ 生活1 (ものの仕組みと働き) ・風の力によって物が動く様子に関心をもつ 図工1 (表現) ・かくこと、ぬること (色鉛筆、クレヨン、スタンプ、アクリル絵の具) ・はること (のり、セロハンテープ、シール)
	・ビニールを使った凧づくり ・凧あげ	(4) 本時 2/4	図工2 (表現) ・かくこと、ぬること (色鉛筆、クレヨン、スタンプ、ペン、アクリル絵の具) ・はること (のり、セロハンテープ、シール)
	・べらぼう凧づくり ・凧あげ	(2)	
第三次	「みんなであそぼう」 ・凧づくり ・3年生にプレゼント ・凧あげ予想 ・みんなで凧あげ	24 (4)	生活1 (生命・自然) ・天気や空の様子 ・四季の特徴や天候の移り変わりに気付く ・地域の行事と季節の関係について知る ・天候の変化に気付く 生活2 (生命・自然) ・天候の変化に関心をもつ ・冬は寒いなどの季節の特徴に関心をもつ 生活1 (ものの仕組みと働き) ・風の力によって物が動く様子に関心をもつ ・風の力は物を動かすことができることに気付く ・風の大きさを変えると物が動く様子も変わることに気付く 図工1 (表現) ・かくこと、ぬること (色鉛筆、クレヨン、アクリル絵の具)
	・凧づくり ・小学部にプレゼント ・凧あげ予想 ・みんなで凧あげ	(16)	図工2 (表現) ・かくこと、ぬること (色鉛筆、クレヨン、ペン、スタンプ、アクリル絵の具) ・切ること (はさみ)
	・凧づくり ・家族にプレゼント ・凧あげ予想 ・みんなで凧あげ	(4)	・切ること (ちぎる、破る) ・はること (のり、セロハンテープ、シール) 図工2 (表現) ・かくこと、ぬること (色鉛筆、クレヨン、ペン、スタンプ、アクリル絵の具) ・切ること (はさみ) ・はること (のり、セロハンテープ、シール)

(4) 単元の評価規準

教科・段階		知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	主体的に学習に取り組む態度
生活1 (2名)	生命・自然	身近な自然の中で遊びながら自然の事物や事象に触れ、生き物などに興味・関心をもっている。	身の回りにある自然の事物や事象に気付き、教師と一緒に他者に伝えている。	身近な公園や川、野山、海などの自然に触れ、知ろうとしている。
		晴れや雨などの天候の変化や四季のおおまかな特徴などに気付いている。	天候の変化や四季の特徴に気付き、教師と一緒に他者に伝えている。	天気や空の様子に触れ、知ろうとしている。
生活2 (2名)	生命・自然	植物や身近な動物に興味や関心を持ち、実際に栽培や飼育を行い、その成長や変化に気付いている。	植物や動物の成長や変化などを記録し、気付いたことを他者に伝えている。	植物や動物の世話をしながら、成長や変化を知ろうとしている。
		天候の変化や、太陽、月、星などと昼夜の関わりや、気温の違いなどの季節のおおまかな特徴を知っている。	天候の変化や四季の特徴を調べ、気付いたことを教師と一緒に他者に伝えている。	天候の変化や四季の特徴などに関心を持ち、知ろうとしている。
生活1 (4名)	ものの仕組みと働き	風やゴムの力によって物が動く様子に関心をもっている。	風やゴムの力によって物が動くことに気付き、教師と一緒に他者に伝えている。	風やゴムの力で物が動くことについて知ろうとしている。
図工1 (2名)	表現	かく遊びやつくる遊びを通して、身の回りの自然物などに触れながらかく、切る、ぬる、はるなどしている。	材料などから、表したいことを思い付き、線や絵をかくなどして表現しようとしている。	かく、切る、ぬる、はるなどの活動に自ら取り組んでいる。
図工2 (2名)	表現	絵画や造形遊びを通して、身近な材料や用具を使い、かいたり、形をつくったりする。	材料や、感じたこと、想像したこと、見たことから、表したいことを思い付き、表現している。	身近な材料や用具に関心を持ち、自らかいたり、形をつくったりする喜びを感じている。

4 本時の計画 (指導計画 第二次 12時間中の8時)

(1) 本時の目標

生活1段階	<ul style="list-style-type: none"> <li>・(A) 風の力によって風があがることに気付き、風あげの場所やあげ方を変化させながら風をあげる。</li> <li>・(B) 風の力によって風があがることに関心を持ち、自分から風をあげようとする。</li> <li>・(C、D) 風の力によって風のあがり方が変わることにについて知り、風あげの場所やあげ方を変化させながら風をあげる。</li> </ul>
-------	--

(2) 学習過程

時間 (分)	学習活動	指導上の留意点	
		全体	個別
10:30 (5)	1 はじめの会 ・学習予定を確認する。 ・今日の天気を発表する。(天気、気温、服装、風)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今日の気温や風の強さを発表する場面を通して、天候への関心を高める。</li> </ul>	
		めあて きょうは たこが あがるかな。たしかめよう。	
10:35 (10)	2 凧づくり ・凧に飾り付けをする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・風の有無を意識できるように、外に設置した吹き流しの動きを係の児童が確認し、選択肢からカードを選んで発表する場面を設定する。</li> <li>・「今日の風で凧はあがるかな」と問い掛ける。また、児童の反応に対して理由を問う。</li> </ul>	
10:45 (2)	3 身支度 ・上着を着る。 ・外履きに履き替える。		
10:47 (16)	4 凧あげ ・中庭へ移動する。 ・自由に凧をあげる。 ・風があがる場所を探す。 ・みんなで凧をあげる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・場所によって風の有無や強さが違うことを意識できるように、吹き流しを四か所に設置しておく。また、T2は児童と同様に凧をあげ、凧があがる場所を探す手本を示す。</li> <li>・風がない場面で「どうしたらあがるかな」などと問い掛けたり、他児やT2の様子に注目させたりする。</li> <li>・児童が風の有無や風と凧のあがり方の関係に気付いた際には、そのことを言語化して伝え、価値付ける。</li> </ul>	A: 他児や教師の凧あげの場所や遊び方を伝えて、誘う。 B: 児童の視線に合わせて「風が吹いたら、凧が動いたね」などと言葉掛けする。
11:03 (2)	5 身支度 ・内履きに履き替える。 ・上着を脱ぐ。		
11:05 (10)	6 まとめ ・気付いたことや、予想に対する結果を発表する。 ・次時の確認をする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・予想したとおり凧があがったか選択肢からカードを選んで貼る場面を設定する。また、その理由を問う。</li> <li>・必要に応じて、始めにT2が発表し、発表の手本を示す。</li> </ul>	B: カードを貼る場面では、児童の凧のあがり方について言語化して伝え、カードを渡す。
		まとめ きょうは <span style="border: 1px solid black; display: inline-block; width: 100px; height: 15px;"></span> (例) ・たこがあがったよ。かぜがあつたよ。 ・たこがあがらなかったよ。かぜがなかったよ。	

中学部 2年 生活単元学習 学習指導案

日時 令和6年12月12日(木) 10:30~11:20  
 場所 音楽室、調理室 生徒数7名  
 授業者 小林 生(T1) 安田幸道(T2)  
 山谷美樹(T3)

1 単元名 中2お米食堂～学校米をPRしよう～

2 単元の概要

生徒は実習田での田植えや稲刈りの経験があり、調理に対する興味もあることから、身近な生産の仕事として米づくりを取り上げた。前単元では、稲の成長やJA農業倉庫で見学した内容を「お米カレンダー」としてまとめた。本単元では、学校米を校内にPRするために、学校米について知った内容や調理をして味わった感想、おいしい炊き方を取り入れたパンフレットやパッケージを作成する。PRに向けた制作や学校米の配布、販売活動を通して、米の生産に関する仕事と自分たちの生活との関連を考える学習を展開する。

3 単元の計画

(1) 単元の目標 (本単元で扱う主たる各教科の内容のまとめ)

教科・段階		知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
社会1 (6名)	産業と生活	生産の仕事は、地域の人々との生活と密接な関わりをもって行われていることが分かる。	仕事の種類や工程などに注目して、生産に携わっている人々の仕事の様子を捉え、地域の人々との関連を考え、表現する。	生産の仕事と地域の人々との関わりに関心を持ち、積極的に学習に取り組む。
家庭1 (7名)	衣食住の生活	簡単な調理を通して、調理の基礎的な知識と技能を身に付ける。	簡単な調理計画について考え、他者に伝える。	調理の仕方や手順に関心を持ち、積極的に学習に取り組む。
生活2 (1名)	手伝い・仕事	できるだけ一人で、配付や運搬の手伝いをしたり、簡単な道具や器具を教師と一緒に使用して作業の手伝いをしたりする。	必要に応じて教師の援助を求めながら、簡単な手伝いや仕事に取り組み、感じたことを表現する。	人の役に立つことのできる手伝いや仕事に自ら取り組む。

(2) 個別の手立て (配慮事項・支援内容)

生徒名	段階	配慮事項・支援内容
A	1	・米の生産と自分や地域の人々の生活について関連付けられるように、生産の工程の中で大変なことや工夫していることに気付く場面を設定する。 ・自分で調理をしようという主体的な気持ちをもつことができるように、おいしい炊飯の仕方やレシピを考える活動を取り入れる。
B	1	・米の生産と能代市の関わりに関心をもつことができるように、学校米の栽培の様子やJAあきた白神で見学した様子をプレゼンテーションソフトにまとめる活動を設定する。 ・炊飯に必要な調理器具や工程を考えられるように、教師と相談しながらレシピを考える活動を設定する。
C	1	・米の生産に携わる人々の仕事に関心をもつことができるように、生産の工程を見て対応する道具や機械を選ぶ活動を設定する。 ・安全な調理の仕方を身に付けられるように、炊飯器やコンセントの取り扱いについて確認する場面を設定する。
D	1	・米の生産と自分や地域の人々の生活の関わりを考えて表現できるように、観察や見学をして気付いた生産に携わる人々の工夫や努力についてまとめる場面を設ける。

		・調理計画を立て、安全な調理について伝えられるように、準備から片付けまでを含めたレシピを考える活動やどのような場面で安全に気を付ける必要があるか考える機会を設定する。
E	1	・米の生産と自分や地域の人々の生活の関わりが分かるように、おいしい米づくりのために生産に携わり人々がどのような工夫や努力をしているかに着目して米づくりの過程をまとめる活動を設定する。 ・調理計画を立て、実際に調理ができるように、立案の際に炊飯に必要な調理器具や材料、分量を考える場面や「2合量る」「米を研ぐ」などの工程をグループメンバーに演示して伝える場面を取り入れる。
F	1	・米の生産と自分や地域の人々の生活の関わりが分かるように、米の栽培から食卓に届くまでの流れをまとめる中で、安全でおいしい米を作るための工夫や努力について考える場面を設定する。 ・炊飯に必要な調理器具や材料、工程が分かって調理できるように、実際に使用する調理器具や材料を使いながらレシピを作る活動を取り入れる。
G	2 (小)	・友達や教師の言葉掛けを聞いて、できるだけ一人で米に関わる作業や学校米のパッケージ作りに関わる作業をすることができるように、ラベルシールの貼り付けに係る教具や活動場所の配置を工夫する。 ・調理に関する関心をもつことができるように、完成予定の料理の写真や使う調理器具を示し、教師と一緒に担当する工程を事前に確認する。

(3) 指導計画 (総時数 34 時間)

小単元名・学習活動		時数	小単元で扱う各教科等と指導内容
第一次	「学校米の活用を考えよう」 ①現在の活用を調べ、今後の活用を考える	5 (1)	社会1(産業と生活)生活2(手伝い・仕事) ・生産の仕事と地域の人々の生活の関わり ・仕事について知る 家庭1(衣食住の生活) ・簡単な調理の仕方や手順 ・簡単な調理計画の立案
	②学校米を使った調理をする	(4)	
第二次	「学校米をPRしよう① ～学校米について知ろう～」 ①稲の成長について調べてまとめる	12 (2)	社会1(産業と生活)生活2(手伝い・仕事) ・生産に携わる人々の仕事の様子 ・歴史的な背景 ・生産と地域の人々の生活との関連 ・地形や気候などの自然条件との関わり ・機械や道具の工夫 ・簡単な道具や器具を使って仕事をする ・食の安全の確保のための努力 家庭1(衣食住の生活) ・簡単な調理の仕方や手順 ・簡単な調理計画の立案
	②米づくりの作業について調べてまとめる	(6)	
	③収穫した米が食卓に届くまでについて調べてまとめる	(4) 本時3/4	
第三次	「学校米をPRしよう② ～学校米を配布、販売しよう～」 ①学校米の名称やPRする方法、伝えたい内容について考える	17 (3)	社会1(産業と生活)生活2(手伝い・仕事) ・生産に携わる人々の仕事の様子 ・歴史的な背景 ・生産と地域の人々の生活との関連 ・地形や気候などの自然条件との関わり ・機械や道具の工夫 ・簡単な道具や器具を使って仕事をする ・食の安全の確保のための努力
	②パンフレット、パッケージづくりをする	(8)	
	③作成したパンフレット、パッケージについてJAあきた白神の方から助言をもらい、改善する	(2)	
	④校内配布、販売に向けて準備し、実施する	(2)	
	⑤購入者からの感想を聞き、PRについて振り返る	(2)	

(4) 単元の評価規準

教科・段階		知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	主体的に学習に取り組む態度
社会1 (6名)	産業と生活	生産の仕事は、地域の人々との生活と密接な関わりをもって行われていることが分かっている。	仕事の種類や工程などに注目して、生産に携わっている人々の仕事の様子を捉え、地域の人々との関連を考え、表現している。	生産の仕事と地域の人々との関わりに関心を持ち、積極的に学習に取り組もうとしている。
家庭1 (7名)	衣食住の生活	簡単な調理を通して、調理の基礎的な知識と技能を身に付けている。	簡単な調理計画について考え、他者に伝えている。	調理の仕方や手順に関心を持ち、積極的に学習に取り組んでいる。
生活2 (1名)	手伝い・仕事	できるだけ一人で、配付や運搬の手伝いや簡単な道具や器具を教師と一緒に使用して作業の手伝いをしている。	必要に応じて教師の援助を求めながら、簡単な手伝いや仕事に取り組み、感じたことを表現している。	人の役に立つことができる手伝いや仕事に自ら取り組んでいる。

4 本時の計画 (指導計画 第二次 12時間中の11時)

(1) 本時の目標

社会 1段階	・精米の体験や玄米と白米の食べ比べを通して、精米の種類について考えたことを表現する。
生活 2段階	・精米の種類が書かれたラベルを容器に貼る、米を容器に入れる作業に取り組む。

(2) 学習過程

時間 (分)	学習活動	指導上の留意点	
		全体	個別
10:30 (5)	1 本時の学習について知る。 ・精米について。 ・家庭で食べている米調べについて。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・精米に関わる道具や写真等を提示し、既習事項の確認と本時の学習内容を伝える。</li> <li>・宿題にしていた生徒や教師の家庭で食べられている写真を発表することで、精米には種類があることに気付かせる。</li> </ul>	
		めあて 精米の種類や特長について知り、販売する学校米を考えよう	
10:35 (10)	2 [A~F] 精米し観察する。 ・分担して白米または五分づき米に精米する。 ・観察して気付いたことを出し合う。 [G] 米の食べ比べの準備をする (10:50まで)。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・T2は精米が終わった白米、五分づき米、米ぬかを入れる容器を分け、観察を促す。</li> <li>・生徒が気付いたことを短冊に書き、黒板に貼って共有する。</li> </ul>	C: 玄米と白米、五分づき米の違いが分かるように、T2は「これは何色ですか」や「玄米はどちらですか」と生徒が分かる言葉で質問する。  G: 集中できるように調理室で行う。T3は一人でラップに包んだ米を容器に入れられるように、教材の配置や見本の提示を工夫する。
10:45 (9)	3 精米について疑問に感じたことなどを分担して調べて発表する。 ・タブレット型端末を使用して調べ、発表する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒が効果的に調べられるように、必要に応じてキーワードなどをアドバイスする。</li> </ul>	発問: 「どうしてT3は玄米を食べているんだろう」
10:54 (9)	4 玄米、白米、五分づき米の食べ比べをする。 ・自分の好む味を選んで投票する。 ・気付いたことを発表する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・味や香り、食感の違いについて生徒が発表した内容を短冊に書き、黒板に貼る。</li> </ul>	C: 味以外の違いを見付けられるように、T2は匂いや色について質問する。
11:03 (15)	5 [A~F] 販売する学校米の精米の種類を考える。 ・理由を添えて自分の考えを書く。 ・考えを発表する。 ・意見をまとめる。 [G] 米の食べ比べで使った容器を片付ける (11:15まで)。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「〇〇を売りたい。なぜなら〇〇」と発表の話型を提示する。</li> <li>・生徒同士で意見をまとめられるように、司会役を指名する。</li> </ul>	
11:18 (2)	6 まとめをする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・販売する学校米の精米の種類について、調べたり比べたりして考えられたことを称賛する。</li> </ul>	

高等部 作業学習 縫製班 学習指導案

日時 令和6年12月12日(木) 10:30~11:20  
 場所 被服室 生徒数 10名  
 授業者 菅 奈穂 (T1) 笠井久子 (T2)  
 鈴木亜希 (T3)

1 単元名 新製品の開発～次年度に向けて～

2 単元の概要

今年度の販売会を終え、アンケートによるお客様からの声を参考にしながら、次年度に向けて新製品の開発を行う。開発にあたり、外部講師からのアドバイスを取り入れ、生徒同士で意見を出し合いながらよりよい製品の製作に取り組む。保護者や教師に商品モニターを依頼し改善を図り、お客様のニーズに応じた製品の完成を目指すことで、製品の社会的な有用性を実感し、勤労の意義の理解につなげる。

3 単元の計画

(1) 単元の目標 (本単元で扱う主たる各教科の内容のまとめ)

教科・段階		知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
職業2 (2名)	勤労の 意義	勤労の意義について 理解を深める。	目標をもって取り組み、 その成果や自分と他者との 役割及び他者との協力につ いて考え、表現する。	作業や実習等を通して貢 献する喜びを体得し、計画 性をもって主体的に取り組 もうとする。
職業1 (8名)	勤労の 意義	勤労の意義を理解す る。	意欲や見通しをもって取 り組み、その成果や自分と 他者との役割及び他者との 協力について考え、表現す る。	作業や実習等に達成感 を得て、計画性をもって主 体的に作業に取り組もうと する。
家庭科2 (3名)	衣食住の 生活	布を用いた製作に必 要な材料や手順が分か り、製作計画について 理解する。	布を用いた簡単な物の製 作計画を考え、製作を工夫 する。	布を用いた製作に関す る学習に積極的に取り組み、 生活に生かそうとする。
家庭科1 (7名)	衣食住の 生活	目的に応じた縫い方 及び用具の安全な取扱 いについて理解し、適 切にできる。	目的に応じた縫い方につ いて考え、工夫する。	目的に応じた縫い方につ いて関心をもち、積極的に 学習に取り組もうとする。

(2) 個別の手立て (配慮事項・支援内容)

生徒名	段階	配慮事項・支援内容
A (2年)	職2	・勤労の意義について理解を深めることができるように、外部講師やモニターからの意見を基に地域で販売できる製品に仕上げるにはどうすればよいか考える場面を設定する。
	家2	・新製品となる布小物の製作計画を立て、ミシンを使った製作を工夫することができるように、既習した縫い方や縫い方の意図について確認する時間を設ける。
B (2年)	職2	・勤労の意義について理解を深めることができるように、外部講師やモニターからの意見を基に地域で販売できる製品に仕上げるにはどうすればよいかを教師と一緒に考える場面を設定する。
	家2	・新製品となる布小物の製作計画を立て、製作に必要な印付けやアイロン掛けを工夫することができるように、既習した方法や次の工程を確認する時間を設ける。
C (3年)	職1	・勤労の意義について理解しながら、他者への貢献につながっていることを実感できるように、仲間やモニターから認められたり、感謝されたりする評価場面を設定する。
	家1	・布の裁断に必要な用具の扱い方を理解し適切にできるように、気を付けるポイントについて自分の言葉でまとめる時間を設ける。
D (3年)	職1	・勤労の意義について理解しながら、他者への貢献につながっていることを実感できるように、仲間やモニターから認められたり感謝されたりする場面や、具体的にどこが良かったのかを教師が評価する場面を設定する。
	家1	・用具の扱い方を理解し適切にできるように、用具を扱う際の手指の使い方や体の向きについて触れながら教師が隣で演示して一緒に行う。
E (3年)	職1	・勤労の意義について理解しながら、他者への貢献につながっていることを実感できるように、担当する作業の必要性や製品にどう生かされているかを教師と一緒に確認する時間を設ける。
	家1	・布の裁断に必要な用具の扱い方を理解し適切にできるように、気を付けるポイントを定期的に質問する。
F (1年)	職1	・他者への貢献につながっていることを実感できるように、振り返り場面で担当する工程が製品にどう生かされているかを教師と一緒に考える時間を設ける。
	家2	・新製品となる布小物の製作計画を立て、ミシンを使った製作を工夫することができるように、既習した縫い方や縫い方の意図について確認する時間を設ける。
G (3年)	職1	・製作の意欲を高めることができるように、作業や活動の目的を教師と一緒に確認する時間を設ける。
	家1	・目的に応じたミシンの縫い方を工夫することができるように、既習した縫い方やその意図を教師と一緒に確認する時間を設ける。
H (2年)	職1	・作業に達成感を得て主体的に取り組むことができるように、得意な作業工程を依頼する。また、完成した製品を基に担当した工程を振り返る場面を設定する。
	家1	・布の裁断に必要な用具の扱い方を理解し適切にできるように、気を付けるポイントを記した写真付きの手順表と裁断した部品の見本を準備する。
I (2年)	職1	・達成感を得て主体的に作業に取り組むことができるように、作業工程の中で担っている役割を掲示物で確認したり、一緒に働く仲間から感謝される場面を設定したりする。
	家1	・作業がしやすい用具の位置や体の向きかどうかを教師と一緒に確認することで、用具を安全に扱うことができるようにする。
J (1年)	職1	・勤労の意義について理解することができるように、現場実習での経験と作業学習での活動を重ねながら働く必要性について教師と一緒に確認する場面を設ける。
	家1	・布の裁断に必要な用具の扱い方を理解し適切にできるように、教師が演示したり先輩の姿に注目する言葉掛けをしたりする。



(3) 指導計画 (総時数 57 時間)

小単元名・学習活動		時数	小単元で扱う各教科等と指導内容
第一次	「学校祭販売会の振り返り」	2	職業1 (勤労の意義) 達成感・成就感、自ら取り組む意欲と態度の育成 職業2 (勤労の意義) 地域貢献の実感、生産に対する意欲の向上
	①販売会の振り返り	(2)	
	②アンケート結果確認 ③今後の予定		
第二次	「新製品の開発」	33	職業1 (勤労の意義) 達成感・成就感、勤労の意義の理解、役割・効率性・連帯感 職業2 (勤労の意義) 勤労の意義の理解、製品や作業学習の社会的な有用性 自分の役割に対する責任や協力することの意義 家庭科1 (衣食住の生活) 用具の安全な取扱い、目的に応じた縫い方 家庭科2 (衣食住の生活) 製作計画、材料や手順の理解、ミシン縫いの工夫
	①新製品開発会議	(2)	
	②外部講師からの指導	(2)	
	③新製品モニター調査のための試作と依頼	(29) 17/29	
第三次	「新製品お披露目会に向けて」	22	職業1 (勤労の意義) 達成感・成就感、勤労の意義の理解、役割・効率性・連帯感 職業2 (勤労の意義) 勤労の意義の理解、製品や作業学習の社会的な有用性 自分の役割に対する責任や協力することの意義 家庭科1 (衣食住の生活) 目的に応じた縫い方 家庭科2 (衣食住の生活) ミシン縫いの工夫
	①モニターからの意見確認	(1)	
	②改善と製作	(20)	
	③新製品お披露目会	(1)	

(4) 単元の評価規準

教科・段階		知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	主体的に学習に取り組む態度
職業2 (2名)	勤労の意義	勤労の意義について理解を深めている。	目標をもって取り組み、その成果や自分と他者との役割及び他者との協力について考え、表現している。	作業や実習等を通して貢献する喜びを体得し、計画性をもって主体的に取り組もうとしている。
職業1 (8名)	勤労の意義	勤労の意義を理解している。	意欲や見通しをもって取り組み、その成果や自分と他者との役割及び他者との協力について考え、表現している。	作業や実習等に達成感を得て、計画性をもって主体的に作業に取り組もうとしている。
家庭科2 (3名)	衣食住の生活	布を用いた製作に必要な材料や手順が分かり、製作計画について理解している。	布を用いた簡単な物の製作計画を考え、製作を工夫している。	布を用いた製作に関する学習に積極的に取り組み、生活に生かそうとしている。
家庭科1 (7名)	衣食住の生活	目的に応じた縫い方及び用具の安全な取扱いについて理解し、適切にできる。	目的に応じた縫い方について考え、工夫している。	目的に応じた縫い方について関心をもち、積極的に学習に取り組もうとしている。

4 本時の計画 (指導計画 第二次 33 時間中の 21 時)

(1) 本時の目標

職業1 段階	・製品開発におけるお客様のニーズが分かり、製品の一工程を自分が担っていることを実感しながら製作する。
職業2 段階	・お客様への意識をもち、お客様のニーズに応じた製品開発ができているかどうか評価し、担当する工程のポイントを理解して製作する。

(2) 学習過程

時間 (分)	学習活動	指導上の留意点	
		全体	個別
10:30 (5)	1 始めの会 ・めあてを確認する。	めあて 試作したトートバッグがお客様のニーズに即しているか評価し、担当する工程のポイントに気を付けながら製作する。	
10:35 (10)	2 試作した製品の評価 ・お客様のニーズに合っているか評価する。 ・評価を踏まえた個人目標を記入する。 <b>トートバッグ大</b> (A、B、D、G、H) (T1) <b>トートバッグ小</b> (C、E、F、I、J) (T2、T3)	・お客様のニーズに応じて評価することができるように、評価項目を可視化する。また、実物を用いて製品を試すことができるように、使用用途に応じた本やペットボトルなどを用意する。 ・生徒同士で評価ができるように、教師が見守りながら必要に応じて分かりやすい言葉に言い換えたり、具体例を提示したりする。	A：評価する視点を理解して意見を出すことができるように、製作する工程のどの部分を改善すべきか教師と一緒に考えたり、使用場面を想像させる質問をしたりする。 E：改善点から自分の作業に生かせるように、「裁断する布の長さはどうしたらいいですか」と担当する工程に応じた質問をする。
10:45 (22)	3 トートバッグの試作 <b>トートバッグ大</b> ・裁断 (H) ・印付け (B) ・印消し (D) ・ミシン縫い (G、A) <b>トートバッグ小</b> ・裁断 (E、J) ・印付け (C) ・印消し (I) ・ミシン縫い (F、A)	・お客様のニーズを意識しながら製作できるように、T1は全体を俯瞰し、T2は印付けとミシン縫いの担当をする生徒、T3は裁断と印消しの担当をする生徒の作業の状況を見て適宜言葉掛けする。	F：改善点から自分の作業に生かせるように、「どの位置に縫い付けたらいいですか」などと担当する工程に応じた質問をする。 G：改善点から自分の作業に生かせるように、担当する工程を教師と一緒に振り返る場面を適宜設ける。
11:07 (3)	4 片付け		H：評価する視点が分かるように、製品の評価する部分を示しながら「このバッグの大きさだと〇〇は入りますか」などと本人に分かる言葉で質問する。
11:10 (5)	5 日誌の記入 ・個人目標を踏まえた振り返りを記入する。	・担当する工程のポイントについて自己評価した日誌の内容を見取り、お客様のニーズとのつながりを示しながら評価し、価値付けする。	I：作業しやすい用具の位置や体の向きになるように用具の位置を調整する。自分の意見を選択肢から選択したり、製品を指差したりする場面を設定する。
11:15 (5)	6 終わりの会	・自分の作業が製品に貢献していると実感できるように、生徒の気付きや思いなどを紹介して共有する。	J：学習の意図を理解できるように、これまでの学習過程を説明しながら教師と一緒に活動する。

令和6年度 年間指導計画 [各教科等を合わせた指導用] 小学部

指導の形態等		生活単元学習				年間時数	予定140時間／実施 時間						
部・年組・グループ・(人数)		小学部1・2年(4名)				作成者(指導者数)	大田若奈(他1名)						
月	単元名・主な学習活動	予定時数(実施)	単元で扱う各教科等								実施状況		
			生活	国	算	音	図工	体育	他				
4	わくわく！1・2年スタート ・プロフィールづくり ・校内探検 ・整列	4 (11)	○ きまり	○ 言葉の特徴や使い方 書くこと									きまりに関する学習活動で、体験的な活動が効果的であったため、予定した時数では足りず、時数を増やした。
4	新入生を迎える会をしよう ・自己紹介 ・ゲーム	2 (2)	○ 遊び	○ 聞くこと・話すこと									予定した学習内容を実施した。
4 5	運動会がんばろう！ ・ポスター制作 ・万国旗制作 ・目標設定 ・小道具制作 ・振り返り	8 (6)	○ 人との関わり	○ 言葉の特徴や使い方 書くこと				○ 表現					制作活動をまとめて行うことができたため、時数減となった。
5 6 7 8	わくわく！1・2年畑 ・野菜や花の栽培 ・絵の具を使った制作 ・調理 ・プレゼント	18 (14)	○ 生命・自然 人との関わり 役割		○ 数と計算			○ 表現					観察する活動を通して、形や色を取り上げた。時数減であったが、予定した学習内容を実施できた。
4 5 6	きせつとあそぼう～はる～ ・思い出の森での観察 ・春の植物、虫	8 (4)	○ 生命・自然 役割 安全	○ 書くこと 言葉の特徴や使い方	○ 数と計算			○ 表現					予定した時数を確保できなかった。前単元と重なる学習内容があったため、単元を合わせて実施してもよかった。
7 8	きせつとあそぼう～なつ～ ・思い出の森での観察 ・夏の植物、食べ物、虫、行事 ・工作 ・夏の遊び	10 (16)	○ 生命・自然 役割 人との関わり	○ 書くこと 言葉の特徴や使い方	○ 数と計算			○ 表現					予定した時数では足りず、時数を増やした。また、国語、算数は扱うことができなかったため、別の単元、教科で扱う。
7 8	たのしい夏休み ・アルバム整理 ・目標設定 ・振り返り	4 (4)	○ 安全 役割 遊び										予定した学習内容を実施した。

9 10 11	きせつとあそぼ う～あき～ ・思い出の森で の観察 ・秋の植物、食 べ物、虫、行事 ・絵画	26 (16)	○ 生命・自 然 人との関 わり 役割	○ 書くこと 言葉の特 徴や使い 方	○ 数と計算		○ 表現					予定した時数を確保で きなかったため、生活 (生命・自然)、図画 工作(表現)に学習内 容を絞った。
10	学校祭がんばろ う！ ・ポスターづく り ・目標設定 ・ステージ練習 ・振り返り	8 (10)	○ 人との関 わり 役割	○ 言葉の特 徴や使い 方			○ 表現					生活(あそび)の学習 内容も取り上げたた め、時数が増えた。
12 1 2	きせつとあそぼ う～ふゆ～ ・思い出の森で の観察 ・冬の植物、食 べ物、虫、行 事、遊び ・凧作り ・プレゼント ・買い物学習	26 ( )	○ 生命・自 然 ものの仕 組みと働 き				○ 表現					
12	ありがとうまつ り ・ボッチャ交流 ・発表 ・挨拶	3 ( )	○ きまり 人との関 わり									
12 1	たのしい冬休み ・大掃除 ・アルバム整理 ・目標設定 ・振り返り	4 ( )	○ 安全 役割									
2	6年生を送る会 をしよう ・手紙 ・挨拶 ・ゲーム	4 ( )	○ 遊び	○ 言葉の特 徴や使い 方 書くこと								
3	しんきゅうおめ でとう ・進級パー ティーの準備・ 運営 ・進級制作	6 ( )	○ 遊び 役割 日課・予 定				○ 表現					
5 10	さつまいも交流 ・苗植え ・収穫 ・挨拶 ・発表	6 (6)	○ 人との関 わり 安全		○ 数と計算							予定した学習内容を実 施した。生活科の自 然・生命の内容につい ても取り上げた。
通 年	避難訓練 ・地震 ・火事	3 ( )	○ 安全									

令和6年度 年間指導計画 [各教科等を合わせた指導用] 中学部

指導の形態等		生活単元学習				年間時数	予定210時間／実施 時間					
部・年組・グループ・(人数)		中学部2年(7名) 内1名(小)生活				作成者(指導者数)	小林生(他2名)					
月	単元名・主な学習活動	予定時数(実施)	単元で扱う各教科等								実施状況	
			国	社	数	理	音	美	保体	職家		他
4	みんなで作ろう～中2スタート!～ ・ 掲示物づくり ・ 学級の目標決め ・ 係活動決め ・ 個人目標決め	8(8)	○ 言葉の特徴や使い方 聞くこと・話すこと	○ 社会参加 ときまり	○ 測定						○ 生活	予定した学習活動を実施した。学級目標の掲示物づくりでは、自分たちで役割を話し合い、模造紙や画用紙を定規で測定した。
4	新入生歓迎会をしよう ・ 制作活動 ・ 話し合い活動	10(10)	○ 言葉の特徴や使い方 聞くこと・話すこと	○ 社会参加 ときまり							○ 生活	予定した学習活動を実施した。集団の中で役割を果たす活動をした。
4 5	進路学習～家の仕事①～ ・ 洗濯の仕方 ・ アイロンのかけ方 ・ 衣服のたたみ方	8(8)		○ 社会参加 ときまり						○ 家族・家庭生活 衣食住の生活	○ 生活	予定した学習活動を実施した。アイロンを安全に使用するのためのきまりを学んだ。
5 6	山・海・友しらかみの恵みを仲間と体験しよう～宿泊学習～ ・ 八峰町の地形や自然についての事前学習 ・ 役割決め ・ 目標決め ・ 掲示物づくり ・ 結団式、報告式	22(20)	○ 言葉の特徴や使い方 聞くこと・話すこと	○ 社会参加 ときまり 我が国の地理や歴史		○ 生命 地球・自然					○ 生活	予定した学習活動を実施した。八峰町の自然から、地形や土地利用の特徴を学んだ。
5 6 7	フルパワー中2～一人じゃがいも畑～ ・ 苗植え ・ 間引き、除草、土寄せ ・ 成長記録 ・ 調理活動	10(12)			○ 測定	○ 生命				○ 衣食住の生活		予定した学習活動を実施した。じゃがいもの栽培を通し、苗から結実までの観察、考察を実施した。成長記録の作成と調理計画立案のため時数が増えた。
6 7	中2お米食堂～秋田・能代の米づくりについて～ ・ 米の品種や生産についての学習 ・ 掲示物、スライドづくり	20(22)	○ 情報の扱い方 言葉の特徴や使い方 聞くこと・話すこと 書くこと	○ 社会参加 ときまり 産業と生活	○ データの活用	○ 生命				○ 情報機器の活用	○ 生活	予定した学習活動を実施した。地域の産業や米づくりといった生産の仕事に関心をもった。能代の米づくりについてJAあきた白神の方に質問を送り、回答をまとめる活動を追加したため時数が増えた。
6 7	進路学習～家の仕事②～ ・ 掃除の仕方 ・ 整理整頓の仕方	8(4)		○ 社会参加 ときまり						○ 家族・家庭生活 衣食住の生活	○ 生活	予定した学習活動を実施した。家庭に必要な掃除や整理整頓のやり方について、生徒がおおむねできていたため時数が減少した。
8 9 10	中2お米食堂～稲～ ・ 稲の成長観察 ・ JAあきた白神の見学 ・ 掲示物、スライドづくり	20(24)	○ 言葉の特徴や使い方 聞くこと・話すこと 書くこと	○ 産業と生活 我が国の地理や歴史	○ 測定	○ 生命 地球・自然				○ 情報機器の活用	○ 生活	予定した学習活動を実施した。実際に種から苗まで育てる活動を行い、植物の成長に必要な条件について学んだ。 ・ 予想→観察→分かったことや気付いたことをまとめるの流れで展開したことで、時数が増えた。

8 9	進路学習～家庭生活と地域～ ・生活に関する制度 ・防災について ・エネルギーについて	10 (6)	○ 言葉の特徴や使い方 聞くこと・話すこと	○ 公共施設と制度 地域の安全		○ 物質・エネルギー				○ 職業生活 家族・家庭生活 衣食住の生活	○ 生活	中2お米食堂の時間を増やしたため、こちらの時間が減り、「物質・エネルギー」に関して実施することができなかった。 総合防災訓練に向けて、関係機関の役割について学んだ。
10 11	フルパワー中2～学校祭を成功させよう～ ・ステージ発表練習	20 (10)	○ 言葉の特徴や使い方 聞くこと・話すこと	○ 社会参加ときまり		○ 音楽づくり 身体表現					○ 生活	音楽、美術の時間にも学習内容を振ったため設定されたため時間が減った。
11 12	中2お米食堂～学校米をPRしよう～ ・学校米のパッケージ作成 ・調理活動 ・掲示物、スライドづくり	30 ( )	○ 言葉の特徴や使い方 聞くこと・話すこと	○ 産業と生活						○ 衣食住の生活 情報機器の活用	○ 生活	
11 12	進路学習～職場見学～ ・先輩の職場について知る学習 ・インタビュー ・掲示物づくり ・お礼状づくり	6 ( )	○ 言葉の特徴や使い方 聞くこと・話すこと 書くこと							○ 職業生活		
1 2	中2お米食堂～中2オリジナルおにぎりを作ろう～ ・能代の特産品を使った具材の開発 ・調理活動 ・掲示物、スライドづくり	10 ( )	○ 情報の扱い方 書くこと	○ 我が国の地理や歴史						○ 衣食住の生活 情報機器の活用	○ 生活	
1 2	進路学習～働くことについて～ ・職業生活について考える学習 ・自己理解	10 ( )	○ 言葉の特徴や使い方 聞くこと・話すこと							○ 職業生活		
2	卒業生を送る会しよう ・制作活動 ・話し合い活動	10 ( )	○ 言葉の特徴や使い方 聞くこと・話すこと	○ 社会参加ときまり								
3	1年間のまとめをしよう ・目標の振り返り ・アルバムづくり	8 ( )	○ 情報の扱い方 書くこと							○ 職業生活 家族・家庭生活		

令和6年度 年間指導計画 [各教科等を合わせた指導用] 高等部

指導の形態等		作業学習				年間時数	予定280時間／実施 時間							
部・年組・グループ・(人数)		高等部 縫製班 (10名)				作成者(指導者数)	菅 奈穂 (他2名)							
月	単元名・主な学習活動	予定時数(実施)	単元で扱う各教科等									実施状況		
			国	社	数	理	音	美	保体	職業	家庭		他	
4	オリエンテーション ・役割分担 ・環境整備 ・掲示物作成 ・目標設定	10 (10)									○ 職業生活			予定した学習活動を実施した。作業目標設定の際、勤労の意義から役割・協力、安全・正確を取り上げた。
4 5	作業の基礎を知ろう ・裁縫道具の使い方 ・裁断 ・アイロンがけ ・ミシン縫い ・草木染め	30 (29)									○ 職業生活	○ 衣食住の生活	○ 自立活動	衣食住の生活から道具の安全な使用を中心に取り上げた。正確な作業と併せて意識させて行ったことで理解につながった。
5 6 7	道の駅ふたついでの販売①に向けて ・布小物製作 ・草木染め ・販売練習(校内販売) ・販売準備 ・販売会	64 (62)			○ 数と計算						○ 職業生活	○ 衣食住の生活	○ 自立活動	販売に向けて購入してもらえる製品作りを目標にしたことで、正確な作業、協力する姿、持続力など、職業生活に必要な基本的な技能や態度が身に付いた。
8 9	道の駅ふたついでの販売②に向けて ・布小物製作 ・草木染め ・販売準備 ・販売会	30 (32)			○ 数と計算						○ 職業生活	○ 衣食住の生活	○ 道徳	前単元で行った販売練習での敬語使用の成果が道の駅の販売で実践できた。外部評価として購入者にアンケートを依頼した。
9 10	学校祭販売に向けて ・布小物製作 ・草木染め ・販売準備 ・販売会	50 (48)			○ 数と計算						○ 職業生活	○ 衣食住の生活	○ 自立活動	外部販売からのアンケートを活用し、購入者のニーズを取り入れることで、作業に対する意欲が上がった。
11 12 1 2	支援ショップに向けて <b>新製品の開発</b> ・学校祭販売会の振り返り ・新製品の開発 ・新製品お披露目会に向けて	68 ( )									○ 職業生活	○ 衣食住の生活	○ 自立活動	
2 3	1年間のまとめ ・役割分担 ・環境整備 ・掲示物作成	28 ( )									○ 職業生活	○ 衣食住の生活	○ 道徳	

## あとがき

本研究では、2年間の取組を通して、各教科等の目標を達成し、育成すべき資質・能力を確かに身に付けさせる教育計画作成の仕組みと各教科等を合わせた指導の授業づくりに取り組んできました。

生活単元学習や作業学習等、いわゆる「合わせた指導」において各教科等の目標を達成させることは、決して学習指導要領の改訂に伴う新たな教育の取組ではなく、従前から「合わせた指導」の大前提とするところでもあります。しかしながら、私の経験した中において「合わせた指導」で大切にされてきたのは学習活動への「参加」であり、「主体的な取組」であったように思います。子どもが目を輝かせて活動に取り組む、じっくりと集中して作業に取り組むことに重きがおかれ、授業研究会においても「どのように手立てを改善すれば子どもが主体的に取り組むか」に主眼がおかれた協議に注力されていたように思います。学習に向かう姿勢は、もちろん知的障害のある児童生徒に求める姿であることに間違いはないのですが、その取組の結果何が身に付いたのか、各教科等の目標は達成されたのか、その議論は十分に尽くされたのか、今更ながら顧みることが多々ありました。指導内容についても同様に、その選択は適切であったか、子どもの実態に応じた精選という理由で、児童生徒の学ぶ機会を奪ってこなかったか。浅学ながらこれまでの知的障害教育を省みる大事な機会となりました。

本研究を通じて、本校では、学習活動への主体的な参加、意欲的な取組を促す手立ては「能代スタンダード」として共通実践し、各教科等の目標を達成することに焦点を当てた「合わせた指導」の授業づくりを積み重ねてきました。また、「観点別学習評価表（学びの履歴シート）」と各教育計画を接続させ、育成すべき資質・能力を着実に育むための仕組みづくりに取り組んできました。この取組は、知的障害教育の抱える課題の一つを解決するアプローチになり得るものと信じておりますし、本研究が県内外の特別支援学校の取組に些少なりともお役に立てれば幸いに存じます。

本校は今年学校創立30周年を迎えました。皆様より御指導、御助言いただきましたことを礎として、この先10年、そしてその先に向け、児童生徒に確かで豊かな学びを保証する学校づくり目指し、教育を拓く取組を今後も推進してまいります。引き続き、御指導御鞭撻賜りますよう、お願い申し上げます。

教頭 佐藤 明

# 研 究 同 人

校長 佐藤 圭吾  
教頭 佐藤 明  
教頭 小玉 慎也

研究部主任  
小学部  
中学部  
高等部  
寄宿舎

山崎 恵  
大田 若奈 田村 夏菜  
小林 生  
武田 聖花 笠井 久子  
水谷 あすか 高橋 雅俊  
小鹿 友里絵 佐藤 初子

## 【小学部】

船山 真生  
高橋 沙織  
大田 若奈  
大高 聡美  
佐藤 輝美  
嶽石 涼  
田村 夏菜  
諏訪 寿昭  
黒木 良介  
大和 路子  
佐藤 礼子  
原田 公子  
渡部 大樹  
中川 朋美  
港 哲子  
井潟 直子  
淡路 碧海

## 【中学部】

伊藤 友和  
山崎 恵  
舘山 奈穂子  
舘岡 裕介  
大山 裕子  
鈴木 迪菜  
渡邊 正徳  
小林 生  
山谷 美樹  
安田 幸道  
原田 知加良  
杉森 利津子  
保坂 周子  
山田 育宏  
熊谷 晃太

## 【高等部】

畠山 幸司  
落合 幸美  
由利 和也  
高橋 勝  
高澤 衣久子  
菊地 操  
佐々木 信子  
武田 聖花  
平塚 朋子  
鈴木 亜希  
市川 堯  
菊地 昭子  
佐藤 尊  
佐賀 有沙  
菅 奈穂  
笠井 久子  
幡宮 明  
橋本 基  
澤井 裕子  
大山 崇彦  
佐々木 正則  
宮田 豪  
中川 祥  
村形 日都美

## 【寄宿舎】

安保 友希  
菅野 倫子  
山田 眞由美  
桧山 環  
阿部 洋  
鷲谷 恵理  
高橋 雅俊  
水谷 あすか  
盛 眞菜美  
小鹿 友里絵  
大高 尚子  
高橋 紀晴  
佐藤 初子  
三浦 陽香  
太田 里香

## 研究紀要 しらかみ 第31号

令和7年3月 発行

発行者

秋田県立能代支援学校

〒016-0005 秋田県能代市真壁地字トトメキ沢135番地

TEL 0185-55-0691

FAX 0185-55-0681

E-mail noshiro-s@akita-pref.ed.jp

ホームページ <https://noshiroshien.ed.jp>